

2020

宗教法人最福寺  
千葉市教育委員会  
株式会社イビソク

宗教法人最福寺 千葉市教育委員会 株式会社イビソク

2020

—墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

# 千葉市うならすず遺跡

千葉市うならすず遺跡

—墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

# 千葉市うならすず遺跡

—墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

2020

宗教法人最福寺  
千葉市教育委員会  
株式会社イビソク



## 例　　言

1. 本書は、千葉市若葉区多部田町1175、1176-1の各一部における宗教法人最福寺の墓地造成事業に伴う発掘調査成果についての埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書作成に至る業務は、宗教法人最福寺・オリエントハウス㈱の委託を受け、千葉市教育委員会の指導のもと、株式会社イビソク千葉営業所が受託し実施した。  
発掘調査は株式会社イビソク千葉営業所 小野、整理・報告書編集作業は青木、濱村が担当し、以下の期間実施した。
3. 発掘調査期間：平成31年4月15日～令和元年5月11日  
調査対象面積：200m<sup>2</sup>  
整理・編集作業：令和元年5月12日～令和2年6月5日
4. 調査指導 西野雅人（千葉市埋蔵文化財調査センター）  
調査担当者 井出祥子（千葉市埋蔵文化財調査センター）  
調査機関 株式会社イビソク 支援調査員 小野麻人 調査補助員 島袋俊之  
整理担当 青木 誠 濱村友美 堀江夏歩
- 調査参加者  
柳谷利勝 石毛秀樹 福田忠雄 福田光子 高橋初枝 川端建雄 浜野多賀子 中村貞子  
野地美保子 木下京子 池田幸子 野本絵子
- 整理参加者  
鷺 玲子 丹羽 香 丹羽牧子 長谷川晶子 森山智晴 蔡下賀代子 山田里美
5. 本書は青木、濱村、堀江、小野が西野・井出の指導のもと分担して執筆を行った。  
青木：第1章・第2章・第4章、井出：第1章第1節、堀江：第1章第2節、濱村：第2章、  
小野：第2章、西野：第3章・第4章  
縄文土器については斎藤弘道氏にご教示いただいた。
6. 発掘調査時における写真撮影は小野が行い、遺物の写真撮影は横山 亮（オフィス・メガネ）が行った。
7. 動物遺体（貝類）の同定・分析については千葉市埋蔵文化財調査センター 西野氏に依頼し玉稿を賜った。
8. 出土遺物及び調査記録は、千葉市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
9. 発掘調査の実施から本書の作成に至るまで、次の諸機関・諸氏のご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表したい。  
(敬称略)  
千葉県教育庁文化課、千葉市教育委員会、宗教法人最福寺、有限会社カワヒロ産業、斎藤弘道、  
いずみ盡園

## 凡　　例

1. 本書に掲載した遺構図などの標高は、千葉市公共座標点3級88-71(若葉区多部田町1492番地先)から調査区割り基準杭12Ge杭(33.141m)と12Gd杭(33.122m)に移設した海拔高からの標高を示す。方位は座標北を表している。
2. 調査区は、任意に10m方眼を設定しており、公共基準点を基軸としている過去の調査区割りとは一致しない。
3. 土層の色調は、農林水産省監修『新版標準土色帖』(2016年度版)を参考にしている。
4. 遺構・遺物の縮尺は以下の通りである。  
竪穴建物跡1/60、溝跡1/100、土坑1/40、炉1/30  
土器大型品1/6、土器片・石製品・石礫1/3
5. 掲載遺物は通し番号を付し、本文・挿図・写真図版共に一致している。
6. 本書挿図に使用したスクリーントーンは、各図版内に凡例を明記している。

## 本文目次

### 例言・凡例・目次

第1章 うならすず遺跡調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 うならすず遺跡の位置と歴史的環境	2
第3節 調査の方法・調査の経過	4
第4節 基本層序	6
第2章 検出した遺構と遺物	7
第1節 繩文時代	7
第2節 時期不明の遺構	15
第3節 遺構外出土遺物	18
第3章 うならすず遺跡出土貝の分析	28
第4章 うならすず遺跡の調査成果 -まとめに変えて-	29
写真図版・抄録	

## 挿図目次

第1図 調査地点・周辺遺跡分布図	1	第11図 27・28・31号遺構	16
第2図 周辺遺跡地図	3	第12図 30号遺構	17
第3図 調査地点と過去の調査位置図	4	第13図 うならすず遺跡遺物組成	18
第4図 全体図・グリッド配置図	5	第14図 出土遺物実測図1	20
第5図 基本層序	6	第15図 出土遺物実測図2	21
第6図 1号竪穴建物跡	7	第16図 出土遺物実測図3	22
第7図 17号遺構	8	第17図 出土遺物実測図4	23
第8図 3・6・24・29・35～37号遺構	11	第18図 出土遺物実測図5	24
第9図 38・43・47号遺構	13	第19図 集落分布の変化	31
第10図 26・33号遺構	15		

## 表目次

第1表 1号竪穴建物跡の内部施設	8	第4表 貝種組成	28
第2表 遺物観察表	24	第5表 計測値分布 二枚貝殻長(cm)	28
第3表 貝類種名	28		

## 写真図版目次

図版1 完掘全景(北東から)	38号遺構遺物出土状況(南西から)
完掘全景(北西から)	47号遺構断面(北から)
図版2 基本層序(南から)	26号遺構断面(南西から)
1号竪穴建物跡完掘(西から)	26号遺構完掘(西から)
図版3 17号遺構検出状況(西から)	33号遺構検出状況(西から)
17号遺構完掘(西から)	33号遺構断面(東から)
17号遺構断面(南西から)	28号遺構貝出土状況(東から)
6号遺構完掘(東から)	包含層遺物出土状況(東から)
2・48号遺構完掘(北から)	図版5 27・28・31号遺構完掘(東から)
7～11号遺構完掘(北西から)	30号遺構完掘(西から)
37号遺構完掘(南から)	図版6 出土遺物1
38号遺構土層断面(南西から)	図版7 出土遺物2
	図版8 出土遺物3
	図版9 出土遺物4

# 第1章 うならすず遺跡調査の概要

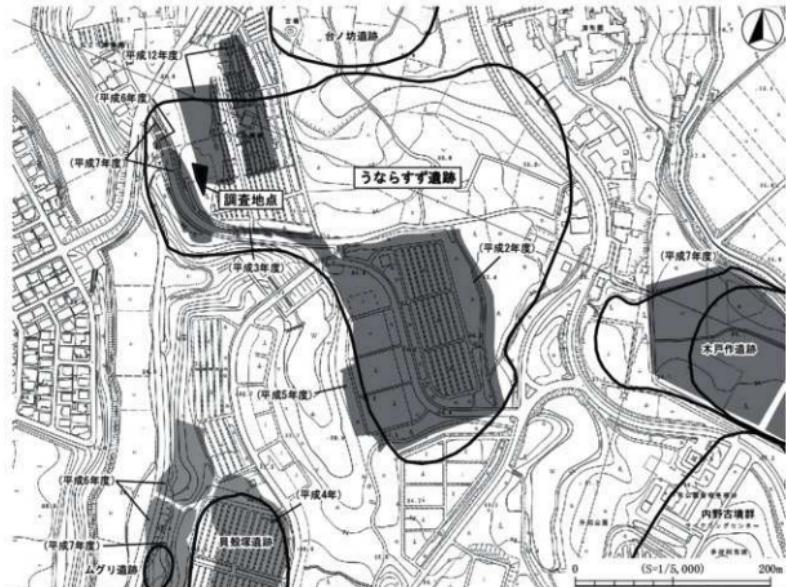
## 第1節 調査に至る経緯

平成30年10月31日付けで、宗教法人 最福寺（以下「事業者」という。）から、墓地造成を計画している千葉市若葉区多部田町1168-1外（面積6,145.50m<sup>2</sup>）について、「埋蔵文化財発掘の届出について」が千葉市教育委員会教育長あてに提出された。試掘の結果、竪穴建物跡等が検出されたため、同年12月4日付け30千教埋セ第265号にて、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

その後、平成31年1月7日付けで、事業者より「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年1月15日付け30千教埋セ第360号にて千葉県教育委員会教育長宛て報告し、同年1月21日～1月30日の日程で千葉市埋蔵文化財調査センターが確認調査を実施した。

その結果、縄文時代竪穴建物跡などが検出されたため、同年2月21日付け30千教埋セ第400号にて、調査面積のうち581m<sup>2</sup>を本調査対象範囲として継続協議が必要との旨を事業者宛に通知した。

再度協議の結果、対象範囲のうち保護層が確保できず土木工事により埋蔵文化財に影響が生じる範囲200mについて、記録保存のための本調査を実施することとなった。同年4月5日付けで、事業者より「埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」が提出され、同年4月5日付け31千教埋セ第42号にて埋蔵文化財発掘の報告を行い、依頼者の委託を受けた株式会社イビソクの支援のもと、千葉市教育委員会が主体者となり、同年4月15日から発掘調査を開始した。



第1図 調査地点・周辺遺跡分布図

## 第2節 うならすず遺跡の位置と歴史的環境

### (1) 遺跡の立地

うならすず遺跡の所在する千葉県千葉市若葉区多部田町は、下総台地の南側に位置する。下総台地は千葉県北部一帯にまたがる広大な台地であり、それを村田川や鹿島川をはじめとする複数の小河川が浸食している。これらの河川によって開析された結果、海側には比較的起伏の少ない段丘の丘陵と、内陸側には比較的起伏の多い洪積台地の二つが下総台地には広がっている。

そんな下総台地を流れる河川の一つである都川は、千葉県のほぼ中央を東西に流れ東京湾へ注ぎ、うならすず遺跡はその中流域に位置する。都川の南岸には、開析する多部田支谷によって形作られる舌状の洪積台地が存在しており、本遺跡はその台地上に所在している。

この台地は、都川に面した北東側は緩やかな傾斜が見られ、南下するに従い多部田支谷に面する斜面は標高が高く急傾斜となり、最も高いところで標高約43mを測る。本遺跡はその北部東側、標高約30～35mほどに位置に所在している。

周囲からは縄文時代から中・近世に至るまでの遺跡が確認されている。の中でも、多部田貝塚・多部田遺跡・貝殻塚遺跡・ムグリ貝塚・木戸作遺跡・内野古墳群等の遺跡らは、総称して平和公園遺跡群と呼称されている。

### (2) 周辺の遺跡

旧石器時代の遺跡は乏しく、都川中流～上流に位置する芳賀輪遺跡からナイフ形石器と有舌尖頭器、下流に位置する城之腰遺跡からは、ナイフ形石器と尖頭器が出土しているのみにとどまる。

縄文時代の遺跡では、台地の南に貝殻塚遺跡(中期)と大規模馬蹄形貝塚である多部田貝塚(後期)が、北側には台ノ坊遺跡(中期)、西側には木戸作遺跡(縄文時代前期～平安時代)が確認されている。それ以外にも、多部田支谷を挟んだ対岸に中期の遺跡であるハサマ遺跡・大徳遺跡・喜平田遺跡の3カ所が確認され、また、都川を挟んだ対岸の北側には同じく縄文時代の遺跡である北谷津・上ノ台遺跡も所在している。

弥生時代の遺跡は、住居跡が8軒確認された木戸作遺跡が所在しているほか、台地から北西に位置する城之腰遺跡・星久喜遺跡・辺田遺跡にて比較的大規模な集落・墓域が検出されている。

古墳時代の遺跡としては、台地の南東に内野古墳群・内野北古墳群が存在しているが、墳丘が消滅してしまった古墳も複数存在する。

奈良時代～平安時代の遺跡には、台地の縁辺ではあるが、多部田支谷の東側斜面にムグリ遺跡が所在する。この遺跡からは、古墳時代後期と平安時代の住居跡1軒ずつが確認されたほか、奈良・平安時代の製鉄に関連する遺構も確認され、鍛冶遺構などの工房の存在が推測される。

この他の遺跡としては、北西に多部田城跡(戦国時代後期)が確認されているほか、都川を挟んだ対岸東の高根塚群と光連寺台遺跡、台地南側の麓に位置する台古墳群の合計三カ所の塚群が確認されている。



第2図 周辺遺跡地図

### (3) 過去の調査歴

本遺跡では平成2・3・5・6・7・12年度に、合計6回の調査が行われている。

平成2～7年度の発掘調査では、縄文時代の住居跡60軒・土坑296基、古墳時代の住居跡7軒、平安時代の住居跡14軒・掘立柱建物跡6棟・土坑12基、古墳時代～平安時代の方形周溝状遺構2基、時期不詳の溝状遺構17条、その他近代の土坑・溝跡が検出され、縄文時代中期～後期・古墳時代・平安時代の集落跡が台地上に存在していたことが明らかになっている。

平成12年度に行われた発掘調査では、台地上に縄文時代の住居跡14軒以上・土坑36基、古墳時代の住居跡5軒・土坑2基、古墳時代～平安時代にかけての方形周溝状遺構2基、中世の土坑墓5基、土坑5基、近世の溝跡2条のほか、縄文時代あるいは中世と考えられるピットが多数検出されている。

出土した遺物はその8割が縄文土器であり、中でも中期末の加曾利E IV式～後期前葉の堀之内1式のものが主体を占めていた。

この調査では、5軒以上の住居跡が北東側で重複しているのが確認されているほか、調査区北側の確認調査時にも、住居跡と同時期の遺物を複数確認している。このことから、調査区北側に限らず、周辺には同時期の住居群・集落が広がっており、うならすず遺跡だけでなく、付近の多部田貝塚を形成した縄文人の居住域や環境復元などの手掛かりとなりうる遺跡と考えられる。また、古墳時代から中世においては集落から墓域への変遷も窺え、当該地及び周辺地域には広範囲に複合遺跡の存在する可能性が高い。



第3図 調査地点と過去の調査位置図

### 第3節 調査の方法・調査の経過

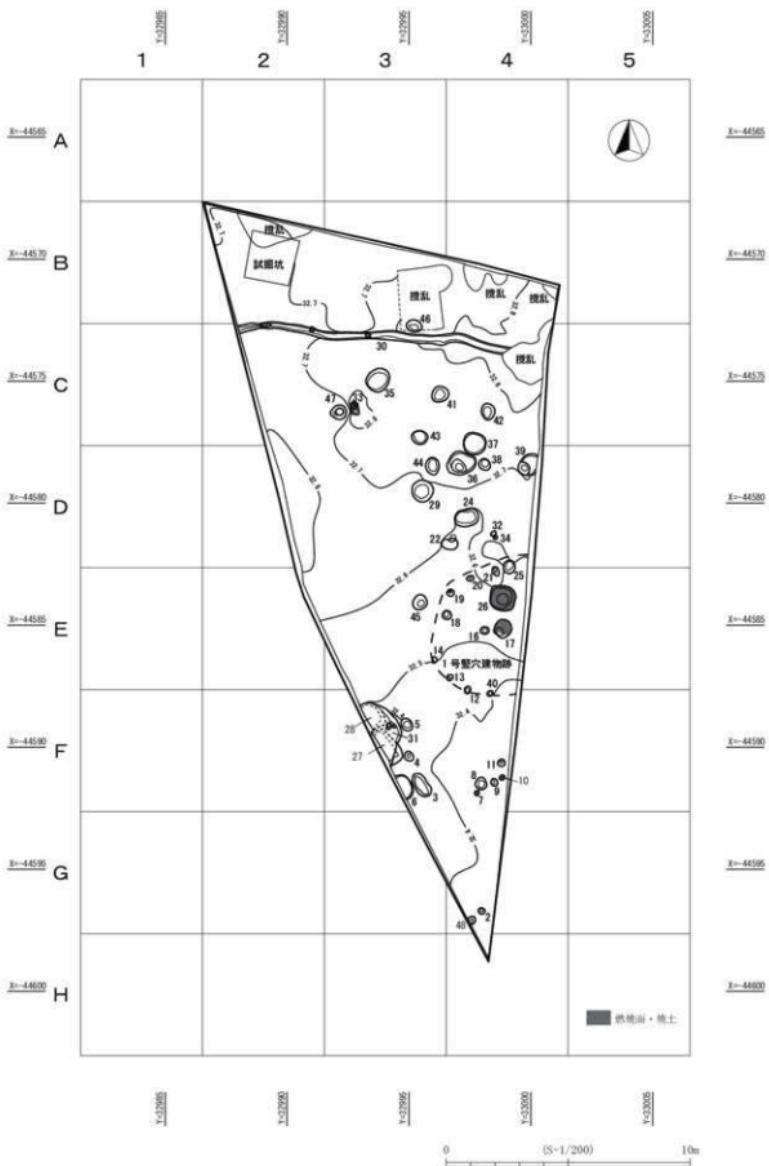
#### (1) 調査の方法

調査区は現況が墓地に隣接していることと、斜面際に位置していることから基準点座標による設定ではなく、現況に合わせた設定を行った。そのためグリッドについても現況を優先して設定した。基準点はVRS・GPSを用いて設置し、現地での位置を杭によって明示した。グリッドは調査区北西隅を基点として $5\text{m} \times 5\text{m}$ の方眼を設定した。各グリッド名はX軸には北から南へA～Iのアルファベットを大文字で、Y軸では1～6の算用数字を付することで、各遺構の位置や出土遺物を取り上げる基準とした(第4図)。

表土掘削は $0.2\text{m}^3$ の重機により行い、その後に人力による遺構検出を実施した。人力掘削時の攪乱掘削・裏面掘削には剣先スコップを用い、遺構の検出には鋤簾、精査・掘削には移植ゴテを用いるなど適宜道具を選択して調査を進めた。

遺構調査では、掘り下げに際して竪穴建物跡・土坑・ビットには2分割法を用いた。なお、遺構からの出土遺物の取り上げは原位置での記録を基本として調査に臨んでいるが、その他の遺物は附隨する施設ごとに適宜記録して取り上げている。包含層中の遺物については、II b層からIII層上面までの遺物をグリッドごとに取り上げを行った。

記録作業のうち、遺構の平面図・断面図の図化作業については手実測とトータルステーションを併用して行った。作図に当たっては、竪穴建物跡は $1/20$ 、土坑は $1/20$ 、カマドや炉跡は $1/20$ の縮尺を用いた。写真撮影は遺構の検出状況・断面・遺物出土状況・完掘状況などを $35\text{mm}$ モノクロ・カラーリバーサル、デジタルカメラ(2000万画素)等を用いて適宜実施した。



第4図 全体図・グリッド配置図

## (2) 調査の経過

平成31年4月15日準備工・基準点測量などと同時に発掘調査を開始。4月16日に重機による表土掘削及び人力掘削を開始した。

17日から調査及び記録作業を実施し、5月10日に各遺構の全体写真撮影に向けた調査区内の清掃を開始し全体写真撮影を行った。

5月10日に基本層序観察のためのテストピット掘削を行い、5月11日発掘調査の記録作業を含めて全ての作業を完了。同日、埋め戻し・資機材の撤収を行い現状復旧をもって調査を完了した。

5月13日より整理作業を開始。

8月8日までに遺構図編集、遺物洗浄・注記・接合・復元を実施。

8月19日より実測・トレース・写真撮影、原稿執筆を行った。

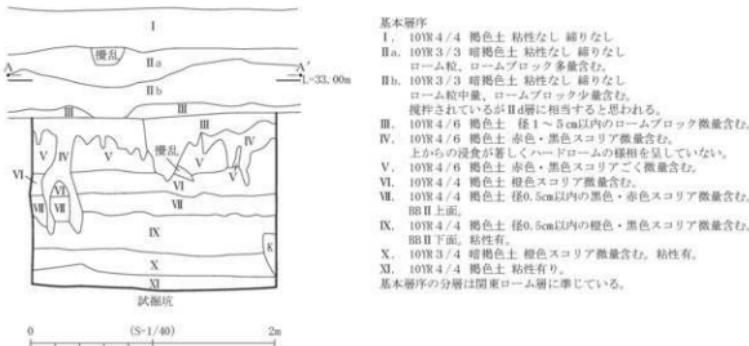
令和2年4月28日版組を作成し、千葉市教育委員会の校正を経て入稿。

6月5日報告書を刊行。

## 第4節 基本層序

本調査地点は台地縁辺部に位置している。基本層序の観察は、調査地点が狭小なこともあり調査区北壁に位置する試掘坑を利用して行った。

観察の結果、概ね関東ローム層の層序に合致するものであり、周辺遺跡の基本層と符合する。I層は現代の表土・擾乱であり、擾乱は直前まで所在していた樹木の根擾乱などに伴うものである。II層は根擾乱及び後世の影響によるためか明らかな遺構・遺物は認められなかった。III層は本来縄文時代の遺構面及び包含層が広がっていたと思われるが、前述の根擾乱及び後世の影響によるものか、遺構の掘り方などが不明瞭な状況である。平成12年度のうならず遺跡の調査でも同様の傾向が見られる。IV層はハードローム層であるが締まりが脆弱であり、その要因は根擾乱によるものと推定されるが調査地点が台地縁辺部であることと関連は明らかではない。V層以下は関東ローム層の層序と同様の状況を観察することができた。以下は基本層序位置と断面図である。



第5図 基本層序

## 第2章 検出した遺構と遺物

### 第1節 繩文時代

#### (1) 竪穴建物跡

1号竪穴建物跡 (炉: 17号、柱穴: 12~14・16・18~21・25・40号含む)

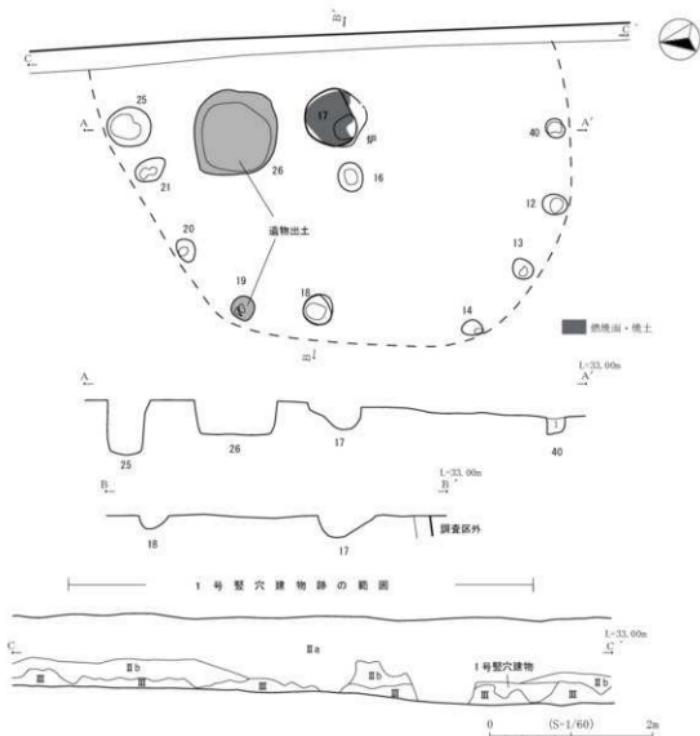
(第6・7・14図、図版2・3・6)

位置 調査区東側、D4、E3・4、F4 グリッドに位置する。東半分が調査区外に延びている。

重複関係 北側に26号遺構が重複する。出土遺物の年代がほぼ同じであるため、新旧関係は不明である。

覆土は明瞭に確認できず、26号遺構と共にローム層Ⅲ層上で検出である。

規模と形状 上面には近現代の根摺乱が深く入りこんでいたためⅢ層まで下げた段階で、17号遺構(炉)と半円形に並ぶピット群の配置により確認した。竪穴部の掘り方や床面は確認できなかった。ピット群の配置から壁際と推定され、平面形は橢円形と考えられる。規模は現状で長軸5.70m、短軸3.68m以上、輪方向はN-35°-Eを測る。



第6図 1号竪穴建物跡

第1表 1号竪穴建物跡の内部施設

数値の単位は(m)

遺構番号	遺構種別	平面形	断面形	長軸×短軸×確認面からの深さ	確認面標高	底面標高	備考
17	炉	楕円形	逆台形	0.75×0.70×0.35	32.58	32.23	
12	柱穴 壁際	円形	U字形	直径0.24×0.55	32.44	31.89	
13	柱穴 壁際	楕円形	円筒形	0.25×0.20×0.50	32.47	31.97	
14	柱穴 壁際	楕円形	V字形	0.23×0.20×0.72	32.50	31.78	
18	柱穴 壁際	円形	直角形	0.36×0.34×0.20	32.58	32.38	
19	柱穴 壁際	円形	段形	直径0.28×0.47	32.57	32.10	称名寺1口縁
20	柱穴 壁際	楕円形	円筒形	0.26×0.20×0.49	32.61	32.12	
21	柱穴 壁際	楕円形	U字形	0.37×0.26×0.48	32.60	32.12	
25	柱穴 壁際	円形	円筒形	直径0.52×0.69	32.60	31.91	
40	柱穴 壁際	円形	円筒形	0.22×0.21×0.21	32.41	32.20	
16	柱穴	楕円形	円筒形	0.29×0.27×0.46	32.54	32.08	

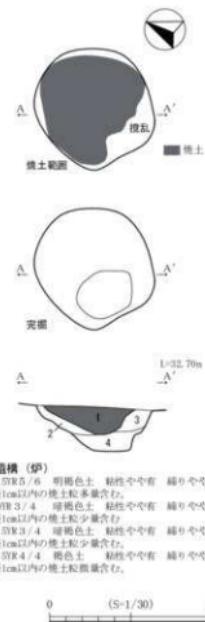
覆土 土層断面C-C'にみられるように、一部Ⅲ層まで達する根攪乱が深く入っており、明確な覆土は検出できなかった。ただし、調査区壁面で観察できるⅢ層直上に1号竪穴建物跡と思われる堆積土が観察されることから、床面及び竪穴の立ち上がりはⅢ層より上位の層に形成されていたものと推定される。

炉 中央に17号が確認された。平面形は楕円形で断面形は逆台形である。規模は長軸0.75m、短軸0.70m、深さ0.35mを測る。火床面はよく赤変し、厚さ約18cmの焼土の堆積がみられる。全体的に根攪乱により軟質で特に南側は一部破壊されている。

柱穴・ピット 主に壁際に配置された10基の柱穴・ピットを確認した。中央の炉の西側に位置する16号遺構以外は、北-西-南にかけての建物壁際に半円形に並んでいる。ピット群の配置は楕円形で、直径0.22~0.52m、深さ0.20~0.72mを測る。主な柱穴同士の間隔は0.90~0.95mのものが多く、0.63~1.10mの規模の範囲に収まる。西側中央の14号遺構と18号遺構の間隔は約2.00mと他の柱穴間よりも広くなっている。ここが入口の可能性も考えられる。

遺物 1号竪穴建物跡の範囲内の遺物は、19号と26号から出土している。炉や大多数のピットでは出土遺物はみられず、19号遺構のみの出土であった。ここからは、称名寺1式の口縁部が1点(第14図1)出土した。26号遺構からは加曾利EⅢ式から称名寺1式(第15図25~32)が出土している。

時期 出土遺物から縄文時代中期末葉~後期初頭の加曾利EⅢ式から称名寺1式期と推定される。



17号遺構(炉)

1. 7.5YR 6/6 明褐色土 粘りやや有 織りやや有 縦1cm以内の焼土粒多量含む;
2. 7.5YR 6/6 明褐色土 粘りやや有 織りやや有 縦1cm以内の焼土粒少量化;
3. 7.5YR 3/4 暗褐色土 粘りやや有 織りやや有 縦1cm以内の焼土粒少量化;
4. 7.5YR 4/4 黒色土 粘りやや有 織りやや有 縦1cm以内の焼土粒無量含む;

第7図 17号遺構

## (2) 土坑

### 3号遺構（第8・14図、図版6）

位置 調査区南西側、F 3 グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

規模と形状 平面形は不整橢円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.17m、短軸0.53m、深さ0.17m、軸方向はN-30°-Wを測る。

覆土 ロームブロックを含む暗褐色土を主体とする単層である。

遺物 後期前葉の土器15点、口縁部2点、胴部12点、底部1点が出土した。条線文の粗製土器主体であり、中期の土器の混入は見られない。このうち、条線文の粗製土器胴部1点（第14図2）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代後期前葉と推定される。

### 6号遺構（第8・14図、図版3・6）

位置 調査区南西側、F 3 グリッドに位置する。西半分が調査区外に延びる。

#### 重複関係 —

規模と形状 平面形は橢円形、断面形は円筒形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.48m以上、深さ0.87m、軸方向はN-26°-Wを測る。

覆土 2層に分けられる。径10cm以内のロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土が主体である。

遺物 後期初頭の称名寺1・2式を中心に、阿玉台式を中心とし、加曾利E III式の胴部が3点、称名寺1式の胴部が17点、称名寺2式の口縁部が3点、胴部が14点、把手が2点、後期の無文の口縁部が5点、条線文の粗製土器が3点、縄文の粗製土器が5点、その他胴部22点、底部1点である。このうち、阿玉台1b式の把手1点（第14図3）、称名寺1式の胴部1点（第14図4）、称名寺2式の胴部1点（第14図5）、把手1点（第14図6）、口縁部1点（第14図7）の計5点を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代中期末～後期初頭の称名寺1・2式期と推定される。

### 24号遺構（第8・14図、図版4・6）

位置 調査区東側、D 4 グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

規模と形状 平面形は橢円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸0.99m、短軸0.68m、深さ0.23m、軸方向はN-71°-Eを測る。

覆土 2層に分けられる。暗褐色土～褐色土が主体であり、2層は、ロームブロックを多量に含む。

遺物 中期末葉加曾利E IV式から後期初頭称名寺1式の土器5点が出土した。内訳は、口縁部が1点、胴部が3点、底部が1点である。このうち、称名寺1式の口縁部1点（第14図8）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代中期末～後期初頭と推定される。

### 29号遺構（第8・14図、図版6）

位置 調査区中央、D 3 グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

規模と形状 平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。底面は概ね平坦である。壁面は急傾斜で掘り込まれている。規模は長軸0.90m、短軸0.88m、深さ0.46m、軸方向はN-3°-Wを測る。

覆土 3層に分けられる。暗褐色土が主体であり、1、2層には少量の焼土や焼土粒、炭化物が含まれる。2層はロームブロックを多量に含むことから人為的な埋め土と思われる。

遺物 中期末葉加曾利E IV式から後期初頭称名寺1式を中心とする土器64点、不明土製品1点が出土した。内訳は、加曾利E III式の口縁部が1点、胴部が3点、加曾利E IV式の口縁部が3点、胴部が6点、加曾利E IV新～称名寺1式の口縁部が3点、称名寺1式の口縁部が5点、胴部が1点、その他口縁部が1点、胴部が39点、底部が2点、不明土製品が1点である。このうち、加曾利E III新式の口縁部1点（第14図9）、加曾利E IV新式の口縁部1点（第14図10）、称名寺1式の口縁部2点（第14図11・12）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代中期終末～後期初頭の加曾利E IV式～称名寺1式期と推定される。

### 35号遺構（第8・14図、図版6・9）

位置 調査区中央北側、C 3 グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

規模と形状 平面形は不整橢円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸1.00m、短軸0.92m、深さ0.23m、軸方向はN-55°-Eを測る。

覆土 3層に分けられる。暗褐色土が主体であり、1・3層は縮りが弱いことから根覗乱などの後世による影響が伺われる。

遺物 後期初頭称名寺式を中心とする土器34点、石製品1点が出土した。内訳は、称名寺1式の胴部が1点、称名寺1～2式の胴部が4点、その他口縁部が1点、胴部が28点である。石製品は石棒である。このうち、称名寺1～2式の胴部1点（第14図13）、称名寺1式の胴部1点（第14図14）、石棒1点（図版9-86）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代後期初頭の称名寺1式期と推定される。

### 36号遺構（第8・14図、図版6）

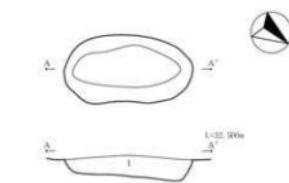
位置 調査区東側、D 4 グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

規模と形状 平面形は不整橢円形、断面形は不整形を呈する。規模は長軸1.13m、短軸0.91m、深さ0.35m、軸方向はN-74°-Eを測る。

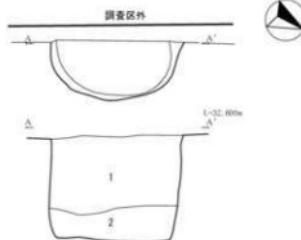
覆土 4層に分けられる。粘性と縮りはやや弱い黒褐色土が主体である。3層に遺物が多く含まれる。

遺物 中期加曾利E IV式を中心とする土器89点が出土した。内訳は、加曾利E III式の口縁部が1点、加曾利E IV式の口縁部が5点、胴部が6点、称名寺式の胴部が3点、加曾利B式～曾谷式の底部が1点、



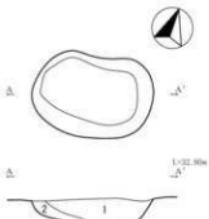
### 3号遺構

1. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性やや有 繊り有  
5cm以内のロームブロック多量、焼土粒微量含む。



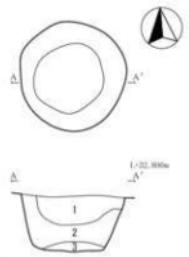
### 6号遺構

1. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性やや有 繊りやや有 ローム粘少量含む。  
2. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有 繊り有 深10cm以内のロームブロック少量含む。



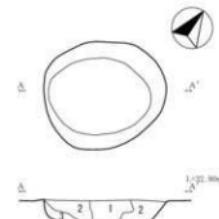
### 24号遺構

1. 10YR 3/4 噴褐色土 粘性有 繊り有  
径1cm以内のロームブロック、炭化物微量含む。  
2. 10YR 4/4 黒褐色土 粘性有 繊り有  
径1cm以内のロームブロック。多量含む。



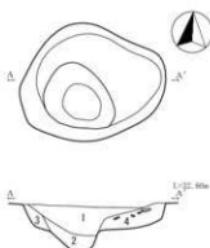
### 29号遺構

1. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性やや有 繊り有  
ロームブロック少量、燒土粒、炭化物微量含む。  
2. 10YR 3/4 噴褐色土 粘性有 繊り有  
径1cm以内のロームブロック多量、燒土、炭化物微量含む。  
3. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性有 繊り有  
ローム粘少量含む。



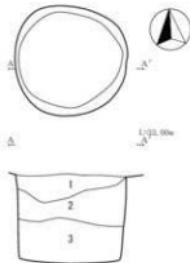
### 35号遺構

1. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性有 繊りやや有 径1cm以内の  
ロームブロック少量、燒土粒、炭化物微量含む。  
2. 10YR 3/4 噴褐色土 粘性有 繊り有 ローム粘少量含む。  
3. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性有 繊りなし ローム粘中量含む。



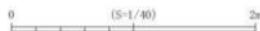
### 36号遺構

1. 10YR 3/2 黒褐色土 粘性やや有 繊りやや有  
ローム粘 (径6.5cm) 少量含む。  
2. 10YR 3/2 黒褐色土 粘性やや有 繊りやや有  
ローム粘、燒土粒微量含む。  
3. 10YR 3/2 黒褐色土 粘性やや有 繊りやや有  
ローム粘中量含む、土器の主な含む。  
4. 10YR 3/3 噴褐色土 粘性全无有 繊りやや有  
ローム粘多量含む。



### 37号遺構

1. 10YR 2/2 黒褐色土 粘性やや有 繊りやや有  
径1cm以内のロームブロック微量含む。  
2. 10YR 3/4 噴褐色土 粘性有 繊り有  
ローム粘、径1cm以内のロームブロック中量、燒土和微量含む。  
3. 10YR 3/4 噴褐色土 粘性有繊り有  
ローム粘、径1~2cm以内のロームブロック多量含む。



第8図 3・6・24・29・35~37号遺構

その他口縁部が6点、胴部が62点、底部が5点である。このうち、加曾利E IV式の口縁部4点（第14図15～18）、壠之内1式と思われる胴部1点（第14図19）を掲載した。

**時期** 出土遺物は縄文時代中期末葉の加曾利E IV式が中心であるが、後期中葉～後葉の加曾利B式～曾谷式も含まれることから、縄文時代中期末葉～後期後葉と推定される。

### 37号遺構（第8・14図、図版3・6）

**位置** 調査区東側、C・D 4グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

**規模と形状** 平面形は円形、断面形は円筒形を呈する。規模は長軸0.93m、短軸0.91m、深さ0.72m、軸方向はN-85°-Wを測る。

**覆土** 3層に分けられる。径1～2cm以内のロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土である。2層と3層はロームブロックを多量含むことから、人為的な埋戻し土の可能性がある。

**遺物** 中期末葉加曾利E III式～後期初頭称名寺2式までの土器15点が出土した。内訳は、口縁部3点、胴部11点である。このうち、称名寺2式の口縁部1点（第14図20）を掲載した。

**時期** 出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭と推定される。

### 38号遺構（第9・15図、図版3・4・6）

**位置** 調査区中央東側、D 4グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

**規模と形状** 平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸0.50m、短軸0.44m、深さ0.49m、軸方向は、N-45°-Wを測る。

**覆土** 2層に分けられる。ロームブロックを含む暗褐色～黒褐色土である。1層中より遺物が出土しているが、出土状況は据えられたような状況ではなかった。

**遺物** 中期末葉加曾利E IV式を中心に、一部加曾利E III式を含む土器12点が出土した。内訳は、加曾利E III式の胴部が2点、加曾利E IV式の口縁部が2点、胴部が2点、その他胴部が6点である。このうち、加曾利E IV式の深鉢口縁部2点（第15図21・22）を掲載した。

**時期** 出土遺物から、縄文時代中期末葉の加曾利E IV式期と推定される。

### 43号遺構（第9図）

**位置** 調査区中央北側、C 3グリッドに位置する。

#### 重複関係 —

**規模と形状** 平面形は梢円形、断面形は皿状を呈する。規模は長軸0.67m、短軸0.56m、深さ0.44m、軸方向はN-81°-Wを測る。

**覆土** 2層に分けられる。ロームブロックを少量含む暗褐色土～黒褐色土が主体である。

**遺物** 後期初頭称名寺1～2式の土器30点が出土した。内訳は、称名寺1式の胴部が3点、称名寺2式の胴部が2点、条線文の粗製土器口縁部が3点、その他の胴部が21点、底部が1点である。このうち、

称名寺1～2式の条線文の粗製土器口縁部1点（第15図23）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代後期初頭の称名寺1～2式期と推定される。

#### 47号遺構（第9・15図、図版4・6）

位置 調査区中央北側、C 3 グリッドに位置する。

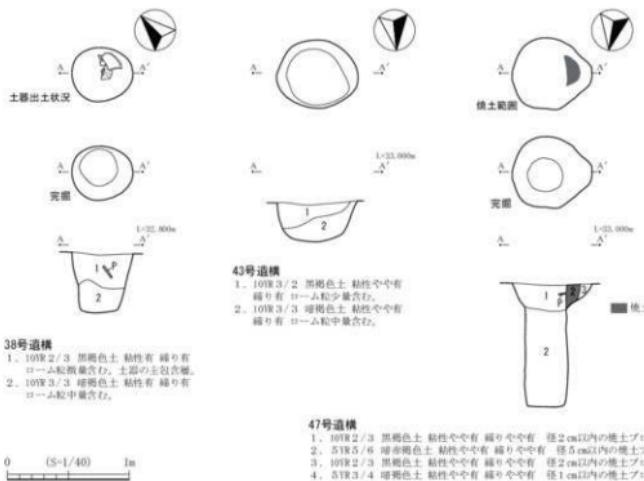
##### 重複関係 一

規模と形状 平面形は不整橢円形、断面形は上半部が半円形、下半部が漏斗形を呈する。規模は長軸0.57m、短軸0.55m、深さ1.01m、軸方向はN-18°-Eを測る。遺構確認面では焼土塊が散布する状況が見られた。中層より下層にかけて直径0.35～0.40m、深さ0.80mの柱穴状の円形の掘り込みが確認され、壁面には被熱・硬化している部分がみられた。

覆土 3層に分けられる。1層は焼土ブロックを少量含む黒褐色土、3層は焼土ブロックを多量に含む暗褐色土である。3層とも根摺乱の影響で焼土ブロックが覆土中に混在する状況であり、締りも弱かった。

遺物 後期初頭称名寺1新式～後期前葉堀之内1式の土器45点が出土した。内訳は、称名寺1新式の口縁部1点、胴部3点、称名寺2式の口縁部1点、胴部3点、堀之内1式の口縁部1点、胴部3点、その他口縁部1点、胴部30点、底部2点である。このうち、堀之内1式の口縁部1点（第15図24）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代後期初頭～後期前葉の堀之内1式期と推定される。



第9図 38・43・47号遺構

### (3) 屋外炉

26号遺構（第10・15図、図版4・7）

位置 調査区東側、E 4 グリッドに位置する。

重複関係 1号竪穴建物跡と重複しているが新旧関係は不明である。1号竪穴建物跡内の内部施設の可能性も考えられるが、1号竪穴建物跡の17号遺構（炉）と隣接していることから本稿では別遺構として報告する。

規模と形状 平面形は円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.20m、短軸1.07m、深さ0.43m、軸方向は、N-35°-Wを測る。中央部に直径0.47mの円形を呈し、底径0.18～0.21m、深さ0.49mを測る擂鉢状を呈する堆積（1層）が観察された。燃焼部と考えられるが、その形状から土器が据えられていた可能性もある。

覆土 5層に分けられ、黒褐色～暗褐色土が主体である。1層は燃焼部、2、3層は被熱部分、4～5層は埋め土と推測される。

遺物 中期末葉加曾利E III式から後期初頭称名寺1式を中心とする土器97点、不明土製品1点が出土した。内訳は、加曾利E III式の胴部が5点、加曾利E IV式の口縁部が12点、胴部が10点、加曾利E IV式～称名寺1式の口縁部が2点、称名寺1式の口縁部が5点、胴部が3点、その他口縁部が2点、胴部が54点、底部が3点、不明土製品が1点である。このうち、加曾利E III式の要素を持つ加曾利E IV式の口縁部1点（第15図25）、加曾利E IV式の口縁部3点（第15図26～28）、称名寺1式の口縁部2点（第15図30・31）、胴部2点（第15図29・32）を掲載した。

時期 出土遺物から、縄文時代中期末葉～後期初頭の称名寺1式期と推定される。

### 33号遺構（第10・15図、図版4・7）

位置 調査区中央北側、C 3 グリッドに位置する。

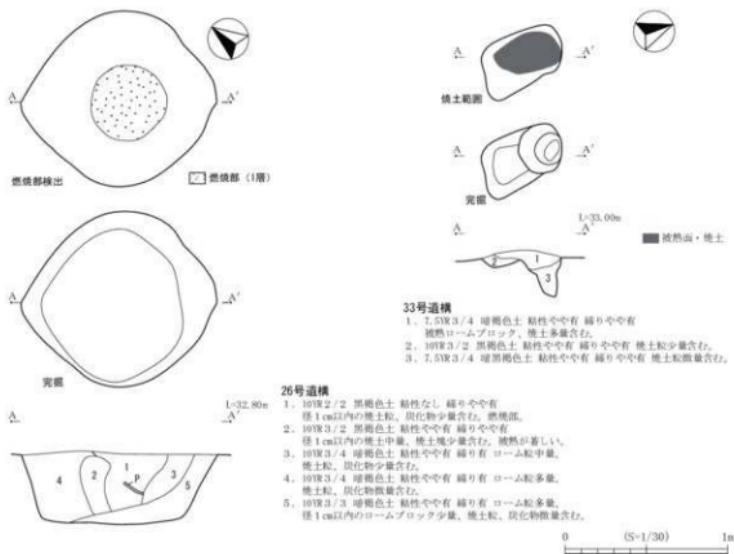
重複関係 —

規模と形状 平面形は不整橢円形、断面形は不整形を呈する。規模は長軸0.51m、短軸0.33m、深さ推定0.14m、軸方向はN-2°-Wを測る。北端に長軸0.19m、短軸0.15m、深さ0.28mの円筒状の掘り込みがあり、南側壁面の上部のみが被熱硬化が見られた。

覆土 2層に分けられる。1層は被熱ロームブロックと焼土を多量に含むが、後世の根攪乱により攪拌されている。

遺物 後期初頭称名寺1～2式の土器11点が出土した。内訳は、口縁部2点、胴部8点、底部1点である。このうち、称名寺1式の胴部1点（第15図34）、称名寺2式の口縁部1点（第15図33）を掲載した。

時期 出土遺物から縄文時代後期初頭の称名寺1～2式期と推定される。



第10図 26・33号遺構

## 第2節 時期不明の遺構

### (1) 土坑

#### 27号遺構 (第11・15図、図版5・7)

**位置** 調査区南西側、F3グリッドに位置する。西半分が調査区外に延びている。

**重複関係** 上面を31号遺構により掘り込まれる。北側上部は28号遺構とわずかに接しており、28号遺構より古い。

**規模と形状** 平面形は隅丸長方形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.55m以上、短軸0.66m以上、深さ0.90m、軸方向はN-33°-Wを測る。

**覆土** 2層に分けられる。暗褐色土～黒褐色土が主体であり、2層ともロームブロックを多量含むことから、人為的な埋め土とみられる。

**遺物** 早期稻荷台式と中期末葉加曾利E IV式～後期前葉称名寺1新式を主体とする土器34点が出土した。内訳は、早期稻荷台式の口縁部が1点、胴部が2点、加曾利E IV式の胴部が2点、称名寺1新式的胴部が3点、その他の胴部が25点、底部が1点である。このうち、称名寺1新式的胴部3点（第15図35～37）を掲載した。

**時期** 出土遺物は縄文時代中期末葉～後期前葉がみられるが、遺構の形状や隣接する28号遺構が古代以降と推定されること、掘り込みが他の縄文時代の遺構よりも深く堆積土の継まりも弱いことなどから古代以降と推定される。

## 28号遺構（第11・15図、図版5・7）

**位置** 調査区南西側、F 3 グリッドに位置する。西半分が調査区外に延びている。

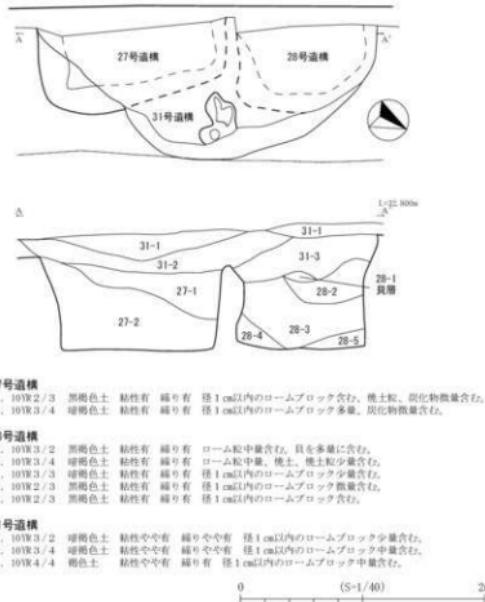
**重複関係** 上面を31号遺構により掘り込まれる。南側上部を28号遺構とわずかに接しており、27号遺構より新しい。

**規模と形状** 平面形は不整梢円形、断面形は逆台形を呈する。規模は長軸1.25m以上、短軸0.65m以上、深さ0.92m、軸方向は、N-35°-Wを測る。

**覆土** 5層に分けられ、暗褐色土～黒褐色土が主体である。1層中からは、幅30cm、厚さ10cm程の範囲に貝がまとまって出土した（貝の分析については第3章で報告）。2層は南側最上部を中心に焼土、焼土粒が含まれる。

**遺物** 繩文時代中期後葉加曾利E III式～後期初頭称名寺2式の土器17点が主に出土した。内訳は、加曾利E III式の胴部が2点、加曾利E IV式の胴部が1点、称名寺2式の胴部が2点、後期前葉の粗製土器の胴部が3点、底部が1点、後期中葉の粗製土器の胴部が2点、その他口縁部が1点、胴部が4点、底部が1点である。このうち、後期前葉の堀之内1式1点（第15図38）、後期中葉の胴部1点（第15図39）を掲載した。

**時期** 出土遺物は繩文時代中期後葉～後期中葉がみられるが、27号遺構より新しいこと、同じく遺構の形状や掘り込みが他の繩文時代遺構よりも深く堆積土の締まりも弱いことから古代以降と推定される。



第11図 27・28・31号遺構

## (2) 溝跡

### 30号遺構 (第12図、図版5)

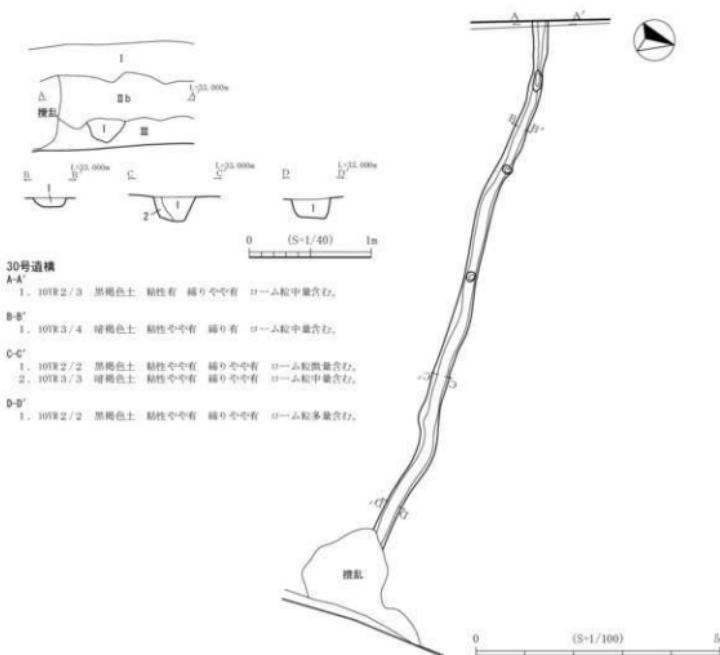
**位置** 調査区北側、B・C 2、C 3・4 グリッドに位置する東西方向の溝である。東西両端とも調査区外に延びる。

**重複関係** 東端を搅乱により切られている。

**規模と形状** 東西方向の全長11.35m以上、上端部幅0.20～0.40m、底面幅0.16～0.27m、深さ0.17～0.30mを測る。軸方向は、N-83°-Wであり、やや蛇行する。断面はU字形を呈する。底面には凹凸が見られ、中には深さ10cm程のピット状になるものも確認している。溝の東西両端の底面標高は、西が32.64cm、東が32.65cm、溝内は32.55～32.65mと概ね同レベルで推移している。

**覆土** 2層に分けられる。暗褐色土～黒褐色土が主体である。締りと粘性は弱い。ロームブロックは少量含まれているものの、底面に細砂などは観察されず、流水・滲水の痕跡は確認されなかった。

**遺物** 中期末葉加曾利E IV式～後期前葉堀之内I式の土器47点が出土した。内訳は、加曾利E IV式の口縁部が2点、称名寺2式の胴部が4点、堀之内I式の口縁部が7点、胴部が3点、その他の胴部が29点、底部が2点であるが、いずれも後世に混入したものと思われる。



第12図 30号遺構

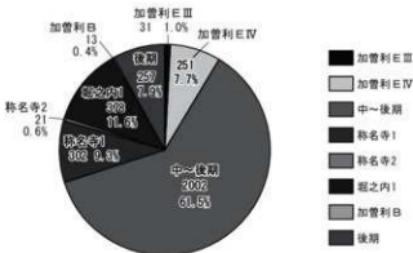
**時期** 出土遺物は縄文時代中期末葉～後期前葉であるが、縄文時代の包含層を掘り込んで構築されていること、覆土が縮まりを欠くことから後世の遺構である可能性が考えられる。遺構の性格としては、区画・境界などの用途が考えられるが、縄文土器以外の遺物や杭跡・柱穴などが見つかっていないため、詳細は不明である。

### 第3節 遺構外出土遺物（第15～18図、図版7～9）

今回の調査では、B 3・4、C 2～4、D 2・3グリッドに位置する遺物包含層から多くの遺物が出土している。この包含層は、基本層序中の主にII b（関東ローム II d）層に相当する。遺物の出土状況としては、広範囲に小破片が多く分布している様相が窺えた。

包含層より出土した遺物はほぼ縄文土器が占めており、部位別の内訳は口縁部279点、胴部1813点、底部92点、把手4点、土製品6点（円盤4点・土器片鉢2点）、不明1点である。石器・石製品は5点出土しており（石鏨1・磨石1・凹石1・砥石1・磨斧1）である。このほか、時代は異なるがC 4グリッドからは古墳時代から古代の土師器が2点出土している。包含層全体の出土割合としてはC 3・4グリッドのものが総点数の90%を占める。

遺構を含む遺物については、斎藤弘道氏に特徴などの観察を依頼した。観察の結果、縄文土器は中期のものが少なく、称名寺式も混ざるものの中葉～後期としたものも含めて堀之内1式の古手に属するものが圧倒的に多いという見解を頂き、それを基に第2表遺物観察表を作成した。遺構・遺構外を含む本調査の時期別の割合は、中～後期61.5%、後期7.9%、堀之内式11.6%、称名寺式9.3%、加曾利E IV式7.7%、加曾利E III式1.0%、加曾利B式0.4%となる。また若干ではあるが、草創期の夏島式や井草式、早期の平坂式、中期後葉の加曾利E II式や末葉のE IV式、後期中葉の加曾利B 3式～曾谷式などが認められることがあった。



第13図 うならすず遺跡遺物組成

包含層から出土した遺物については、斎藤氏との協議の上、以下について実測・掲載した。施文などの特徴については第2表を参照頂きたい。なお、22号出土遺物については遺構図を掲載していないが、堀之内式胴部1点(第15図40)のみ掲載している。

掲載遺物は、グリッドごとに図示している。

B 3グリッドからは加曾利E III式口縁部1点(41)、堀之内1式蓋付口縁部1点(42)の2点、B 4グリッ

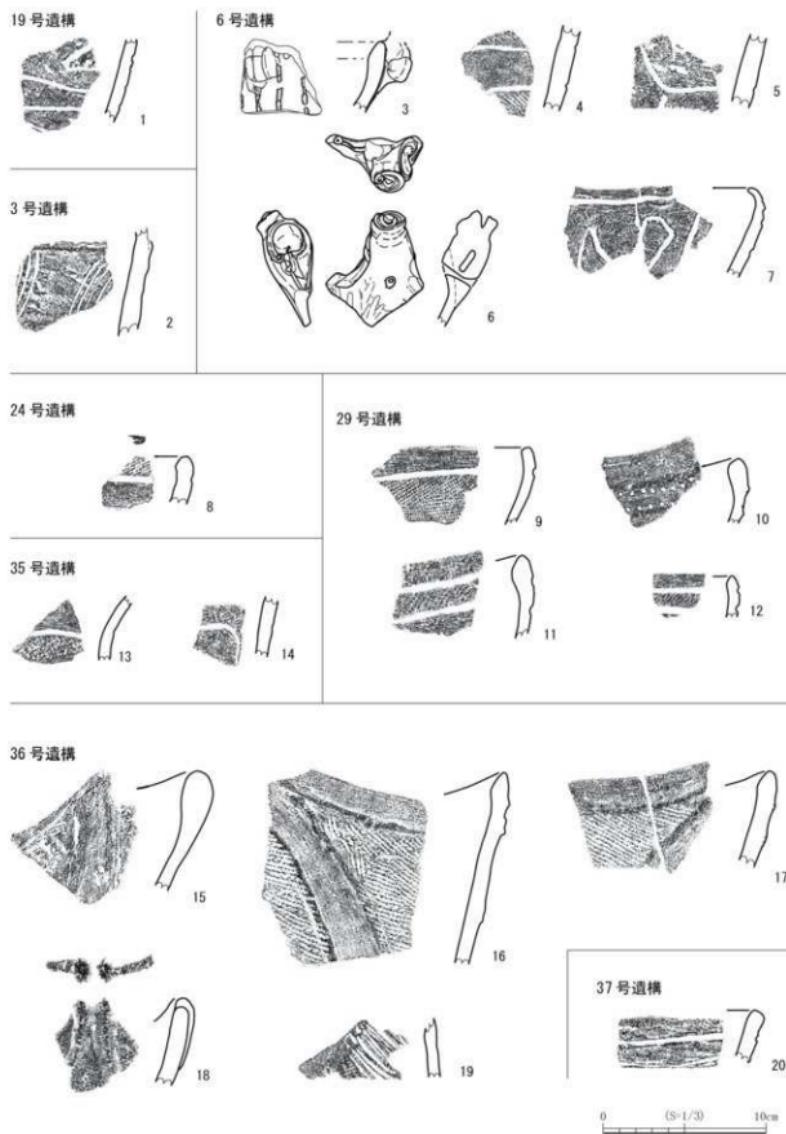
ドからは加曾利EⅢ式新の口縁部1点(43)、加曾利EⅣ式胴部1点(44)、称名寺1式口縁部3点(45～47)、後期前葉の口縁部1点(48)の6点を掲載した。

C2グリッドからは堀之内1式口縁部1点(49)の1点、C3グリッドからは草創期井草式口縁部2点(50・59)、草創期夏島式胴部1点(63)、早期平坂式口縁部2点(60・61)、称名寺1式並行中津式の口縁部1点(62)、加曾利EⅢ式口縁部1点(51)、後期前葉の胴部1点(58)、称名寺1式古の口縁部1点(52)、称名寺式の補修孔の残る口縁部1点(54)、胴部1点(53)、堀之内1式口縁部1点(57)、胴部1点(55)、土偶脚部？1点(56)、分銅形の打製石斧1点(64)、無茎の抉りを有する石鎌1点(65)の16点、C4グリッドからは草創期井草式口縁部1点(78)、加曾利EⅢ式古の口縁部1点(66)、加曾利EⅣ式の突起を有する口縁部1点(67)、称名寺1式の口縁部2点(68・69)、底部1点(70)、称名寺2式並行網取式の口縁部2点(76・77)、堀之内1式の口縁部4点(71～73・75)、突起を有する口縁部1点(74)、墨書のある土師器环1点(79)、土師器甕底部1点(80)、砥石1点(81)の16点を掲載した。このほか、磨石1点(図版9・86)、凹石1点(図版9・87)、磨斧の基部1点(図版9・89)の3点については写真のみ掲載している。

D2グリッドから早期稻荷台式胴部1点(82)、D3グリッドから加曾利EⅢ～EⅣ式期の土器片鍾1点(83)、加曾利EⅣ式の口縁部1点(84)を掲載している。



包含層調査状況

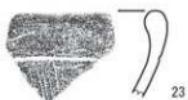


第14図 出土遺物実測図 1

38号遺構



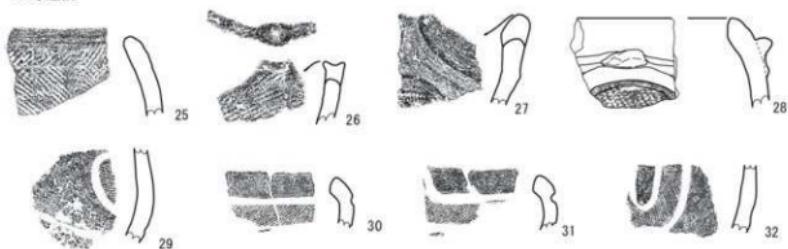
43号遺構



47号遺構



26号遺構



33号遺構



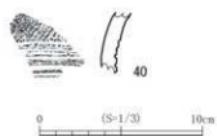
27号遺構



28号遺構



22号遺構



第15図 出土遺物実測図2

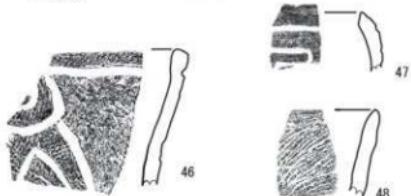
B3 グリッド



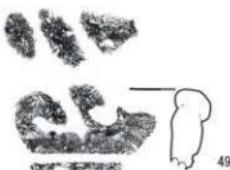
B4 グリッド



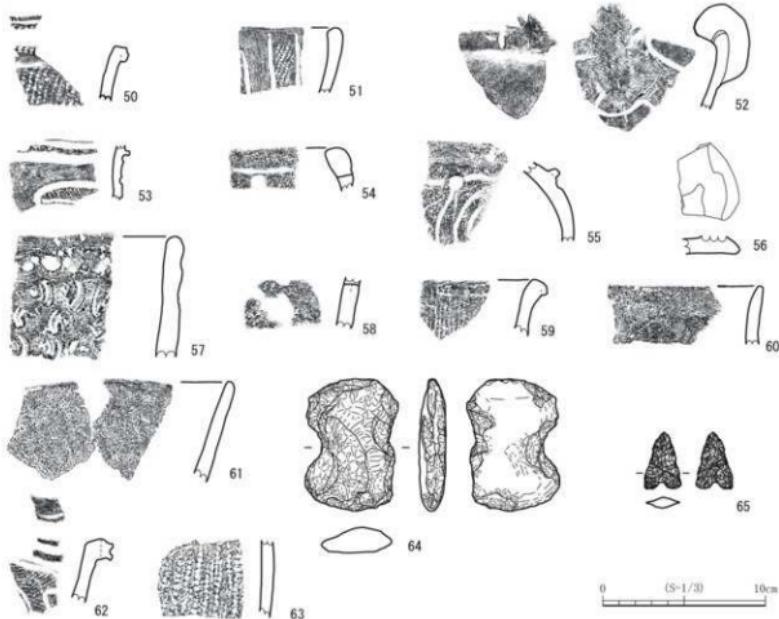
■赤彩



C2 グリッド



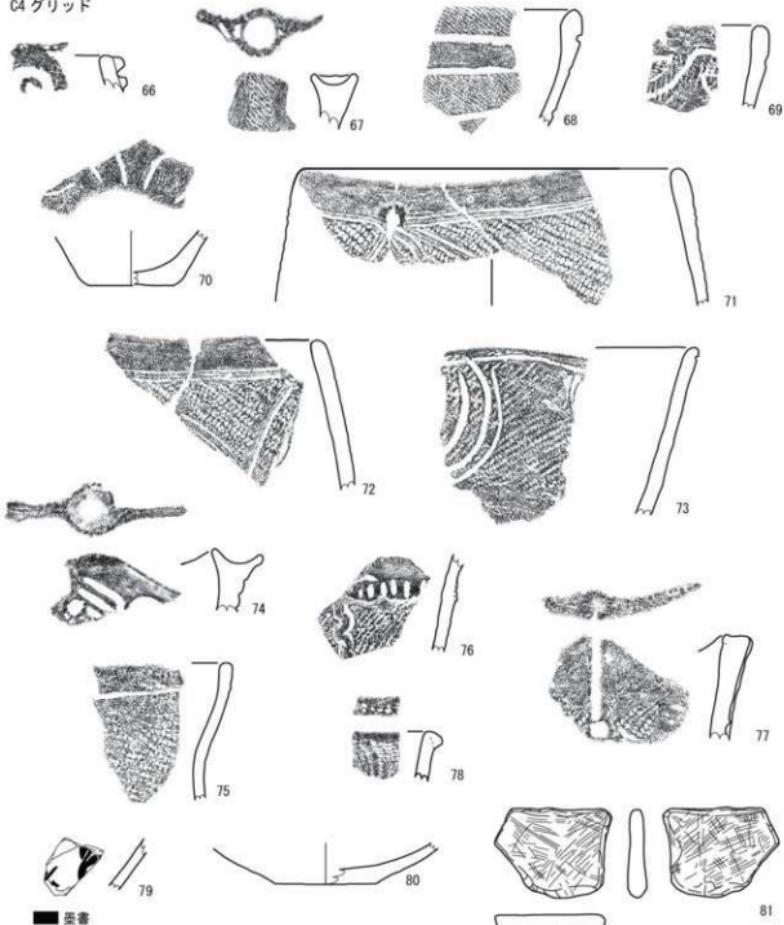
C3 グリッド



0 (5-1/3) 10cm

第16図 出土遺物実測図 3

## C4 グリッド



■ 塗者

## D2 グリッド



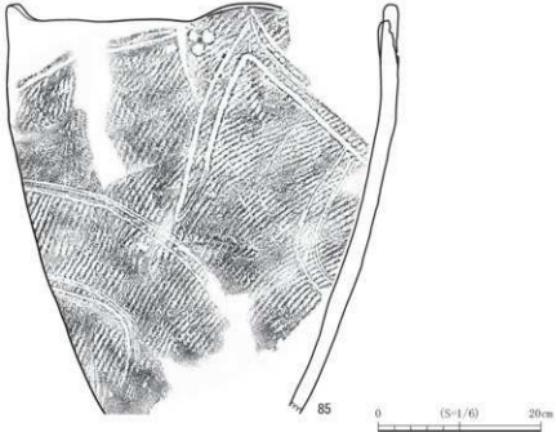
## D3 グリッド



0 (S×1/3) 10cm

第17図 出土遺物実測図4

## 6 トレンチ



第18図 出土遺物実測図5

第2表 遺物観察表

縄文土器

掲載番号	出土位置	種類 器種	部位	口縁 底面 器高	部役・残存率・製作技術・その他特徴	色調 外面/内面	胎土	焼成	時期	備考
1	19号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	— (5.1)	横走、斜走する沈縫区画内に円形刺突を加えた貼付文を施す。区画外に単縫起縄文を横位削輪で一部に施す。	にぶい・黄褐色 10YR7/4	密	良	称名寺1式	
2	3号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	— (6.7)	胴部上位に横走起縄文、5条一対の梢接条縄文を縱位に施す。	明褐色 7.5YR5/6	粗	良	後期前葉 煤付着	
3	6号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (4.6)	口縁部直下に平行文を施し、継位の竹管による押印文を施す。 口面上位に梗を有する。	褐 7.5YR4/4	密	良	阿玉台1b	
4	6号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	— (5.3)	横走する沈縫間を埋り消し、区画内に単縫起縄文を横位削輪で施す	にぶい・黄褐色 10YR4/3	密	良	称名寺1式	
5	6号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	— (4.6)	曲線的な沈縫区画内に短沈縫を施す。区画外は継位のナデにより仕上げる。	にぶい・赤褐色 2.5YR5/4	密	良	称名寺2式	
6	6号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (7.1)	波状口縁部片。頂部に横位の穿孔を有し、上面に刺突を有する円文を施す。把部の下部に穿孔を有し、継位の細い沈縫文を施す。	褐 7.5YR6/6	密	良	称名寺2式	
7	6号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (5.5)	口縫直下に1条の沈縫を施らせる。以下に斜位の沈縫文と曲線的モチーフを描く。口縫部は内溝する。	にぶい・褐 7.5YR5/4	密	良	称名寺2式	
8	24号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (2.9)	口縫直下に単縫起縄文を横位削輪で施す。以下に横走沈縫文を施らせる。磨り消す。口縫端部内面直下に梗を有する。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
9	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (4.7)	口縫部は内溝し、口縫部無文帯下に1条の沈縫をめぐらし、以下に単縫起縄文を横位削輪で施す。	暗灰褐色 2.5YR3/1	密	良	加II式(新)	
10	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (4.2)	波状口縫部片。口縫部は内溝し口縫部無文帯下に2条の断面三角形状の横張筋を施す。波状間間に2段の刺突文列を施す。	にぶい・黄褐色 10YR5/4	密	良	加III式(新)	
11	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (4.8)	波状口縫部片で口縫部は内溝する。口縫部無文帯下に2条の沈縫をめぐらし沈縫間に単縫起縄文を横位削輪で施す。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
12	29号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (2.4)	内溝する口縫部片で、口縫部無文帯下に2条の沈縫をめぐらし沈縫間に単縫起縄文を横位削輪で施す。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
13	35号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	— (3.6)	体部中央で括れ口被部に向て外反する。上位は無文帯となり、下位に単縫起縄文を横位削輪で施す。1条の沈縫で区画される。	にぶい・赤褐色 3YR4/4	密	良	称名寺1式	
14	35号遺構	縄文土器 深鉢	胴部片	— (3.8)	U字状の区画沈縫を描き、区画外に単縫起縄文を横位削輪で施す。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	称名寺1式	
15	36号遺構	縄文土器 深鉢	口縁部片	— (7.3)	波状口縫部片。波頭部から2条単位の横張起縄文が飛下される。無縫隙2段が横位削輪で施される。その上に2条単位の平隠竹管文による沈縫文を加える。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	加IV式	

掲載番号	出土位置	種類・因縁	部位	口縁底径 mm	部位・残存率・製作技術・その他特徴	色調 外側/内面	断土	焼成	時期	備考
16	36号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(11.8)	波状口縁部片。口縁部無文帯を1条の断面三角形の隆帯で区画し、波頭部から2条単位の弧状文が同様の隆帯で描かれる。その後単語文帯が継ぎと斜位回転で施される。口縁部内面に棱を有する。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	加EIV式	
17	36号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(5.9)	波状口縁部片。口縁部無文帯を1条の断面三角形の隆帯で区画し、波頭部から2条単位の弧状文が継ぎと斜位回転で施される。口縁部内面に棱を有する。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	加EIV式	
18	36号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(5.3)	波状口縁部片。波頭部から2条単位の断面三角形の隆帯が窪下する。	にぶい黄褐色 10YR5/4	密	良	加EIV式	
19	36号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(4.6)	破片上位を無文帯とし、单語調文Rを横位回転で施し、その上に斜行沈縫を密に施す。	明赤褐色 5YR5/6	密	良	埴之内I式	
20	37号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(3.2)	口縁部に1条の太目の沈縫をめぐらし以下にやや細目の沈縫を施す。	暗褐色 7.5YR3/4	密	良	称名寺2式	
21	38号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(6.4)	波状口縁部片。波頭部から1条の断面三角形の隆帯を窪下させる。破片左側には單語多角形の横調文を継位回転で施す。	暗褐色 10YR3/4	密	良	加EIV式	
22	38号遺構	調文土器 深鉢	口縁～胴部片	(16.6)	波状口縁部片。口縁部無文帯を断面三角形の横隆帯1条で区画される。波頭部から弧状の横調文を施し、波底部から斜行する横調文を施す。地文として单語調文Rを継位回転で施す。一部を斜位回転で施す。口縁部内面に棱を有する。	明褐色 7.5YR5/6	密	良	加EIV式	
23	43号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(5.3)	口縁部は内面に口縁部無文帯下位に1条の沈縫をめぐらし、以下に継位の沈縫を施す。	にぶい黄褐色 10YR6/4	密	良	称名寺1～2式	
24	47号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(2.2)	口縁直下に1条の沈縫をめぐらし、以下に継位の沈縫を施す。	褐 7.5YR6/6	密	良	埴之内I式	
25	26号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(4.9)	口縁部無文帯下に單語調文Rを横位回転で1段施す。以下は継位回転で施す。	褐 10YR4/4	密	良	加EIV式 (古)	I解出土
26	26号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(3)	波状口縁部片。波頭部の上面に凹みを加える。口唇部から口縁部にかけて单語調文Rを横位回転で施す。	褐 7.5YR4/3	密	良	加EIV式	
27	26号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(5.6)	波状口縁部片。口縁部無文帯に断面三角形の横調文R字状のターフを接着し、以下に同様の横調文による区画内に单語調文Rを施す。口縁部内面に棱を有する。	暗褐色 10YR3/3	密	良	加EIV式	
28	26号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(5.5)	口縁部内面に凸高し、口縁部無文帯下位に断面三角形の横調文Rとすることの区画を施し、その中央部に舌状の隆帯を貼付する。以下に单語調文Rを斜位回転で施す。	にぶい黄褐色 7.5YR6/6	密	良	加EIV式	
29	26号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(5.8)	太い沈縫による区画内に单語調文Rを継位と横位回転で施す。	にぶい赤褐色 5YR4/4	密	良	称名寺1式	
30	26号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(3.1)	口縁部無文帯下に1条の沈縫を寄せさせ、以下に单語調文Rを横位回転で施す。口縁部内面底に棱を有する。	褐 7.5YR4/3	密	良	称名寺1式	
31	26号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(3.4)	口縁部無文帯に1条の太い沈縫を寄せさせ、一部を口唇部まで立ち上げる。以下に单語調文Rを横位回転で施す。口縁部内面底直下に棱を有する。	褐 7.5YR4/4	密	良	称名寺1式	
32	26号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(4.2)	太い沈縫によるU字状の区画内に单語調文Rを継位と横位回転で施す。	黑褐色 10YR3/2	密	良	称名寺1式	
33	33号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(2.3)	曲線的な沈縫による区画内に单語調文Rを施すが捻りの方向は不明				称名寺1式	
34	33号遺構	調文土器 深鉢	口縁部片	(3.5)	口縁部は歪み、小突起を付すかもしない。口縁部無文帯下に1条の深い沈縫をめぐらす。	明赤褐色 5YR5/6	密	良	称名寺2式	炭化物付着
35	27号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(4.4)	継位と円形容の区画を施し、区画外に無軸調文Rを施す。	灰黃褐色 10YR4/2	密	良	称名寺1式	
36	27号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(4.9)	脇部が書き込むU字モチーフの区画内に单語調文Rを横位回転で施す。	にぶい褐色 7.5YR5/4	密	良	称名寺1式	
37	27号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(4.4)	継位の沈縫区画内に单語調文Rを横位回転で施す。	黑褐色 2.5YR3/2	密	良	称名寺1式	
38	28号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(3.8)	横走する沈縫区画下に单語調文Rを横位回転で施す。	灰オリーブ 5YR2/2	密	良	埴之内I式	
39	28号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(6.0)	单語調文Rを継位回転で施す。	にぶい黄褐色 10YR5/3	密	良	後期前葉	
40	22号遺構	調文土器 深鉢	胴部片	(3.7)	单語調文Rの横位回転の地文上に、半載竹管文による沈縫文が施る。	明赤褐色 5YR5/6	密	良	埴之内I式	
41	B3グリッド	調文土器 深鉢	口縁部片	(4.1)	波状口縁を呈する。口縁部に低張帯と太沈縫による鶴井形の区画を構成し、区画内に单語調文Rを横位回転で施す。	にぶい黄褐色 10YR5/4	密	良	加EIV式	
42	B3グリッド	調文土器 表層	口縁部片	(4.4)	口縁部直下に1条の沈縫をめぐらし以下を無文帯として横位の窪きを施す。口縁部の内面に蓋受用の突筋がめぐる。	暗褐色 10YR3/3	密	良	埴之内I式	

揭露番号	出土位置	種類	部位	口徑底径	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外面/内面	粘土	焼成	時期	備考
43	B4グリッド	有孔鉢付土器	口縁部片	(3, 1)	口縁部は体部から内傾して立ちあがる。口縁部無文帯下に跨がめぐり、跨に孔を有する。以下に断面三角形の施縫を斜位に施す。	褐色 10YR4/4	密	良	加EⅣ式 (新)	内外面赤色あり
44	B4グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	-	垂下する断面三角形の施縫帶に沿って単脚縄文LIIを斜位回転で施す。	にぶい黄褐色 10YR5/4	密	良	加EIV式	
45	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部 ～胴部片	(7, 2)	波状口縁を呈する。太い波線でJ字状モチーフや横長椎円形文を繰り返す。内面に单脚縄文LIIを模様化、斜位、縦位回転で施す。	黒褐色 10YR3/2	密	良	称名寺I式	
46	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(8, 4)	口縁部は体部から内傾して立ちあがり口唇部は平底に作出され、内側に孔を有する。口縁部無文帯下に施縫を斜位回転で施す。	灰黄褐色 10YR4/2	密	良	称名寺I式	
47	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(3, 7)	口縁部は体部から内傾して立ちあがり口唇部は平底に作出され、内側に孔を有する。口縁部無文帯下に施縫を斜位回転で施す。口縁部内面に施縫を有する。	にぶい黒 7, SYR5/4	密	良	称名寺I式	内外面赤色あり
48	B4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(5, 4)	口縁部は体部から内傾して立ちあがる。全面に斜位の条縄文を施す。	黒褐色 7, SYR3/1	密	良	後期前集	
49	C2グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(4, 9)	口縁部に棒状の黏土縫を斜位に貼りつけている。以下に1条の太い波線を施す。	明赤褐色 SYR5/6	密	良	埴之内I式	
50	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(3, 4)	口縁部は体部から直立して立ちあがり口唇部は肥厚する。口縁部上部に1条の波縫を施し、外周部に单脚縄文LIIを斜位回転で施す。体部にも同じ施縫を施す。	にぶい赤褐色 SYR4/3	密	良	井草I式	
51	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(4, 6)	口縁直下から2条組みの重ねた波縫を施し凹面部に单脚縄文LIIを斜位回転で施す。波縫の左端にはU字型のモチーフを有する。	明赤褐色 SYR5/6	密	良	加EⅣ式	
52	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(6, 5)	口縁部は体部から内傾して立ちあがる。口唇部は内傾状態で作出され、口唇部と縦位の斜口縫を付す。口唇部を主として内側から外周部の口縁部にかけて縱長の貼付文を有す。貼付文上部にU字型のモチーフを模様化、斜位回転で施す。口縫直下から2条組みの重ねた波縫を施す。口縫の内側に波縫を有する。	褐色 7, SYR7/6	密	良	称名寺I式 (古)	
53	C3グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	(3, 4)	横走するU字型と横長椎円形のモチーフを繰り、区画内に单脚縄文LIIを横位回転で施す。	明褐色 7, SYR5/6	密	良	称名寺I式	
54	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(2, 7)	口縁部無文帯下に柔軟な沈縫をめぐらし以下に单脚縄文LIIを斜位回転で施す。縄文施縫部に焼成後の波孔がみられる。	黒褐色 7, SYR5/2	密	良	称名寺I式	埴之内式
55	C3グリッド	縄文土器 注口土器	胴部片	(4, 9)	口切部に施縫文帯とし、1条の波縫を施す。体部に單脚縄文LIIを斜位回転で施す。縄文施縫部に焼成後の波孔がみられる。	明褐色 7, SYR5/6	密	良	埴之内I式	
56	C3グリッド 表層	縄文土器 蓋	胴部 ～底部片	(1, 1)	無文の施縫部から体部へかけて内傾して立ちあがる。	明赤褐色 SYR5/6	密	良	埴之内I式	
57	C3グリッド 表層	縄文土器 深鉢	口縁部片	(7, 4)	縫の波状紋を呈する口縫直下に円形の押正窓を残す。以下に多岐竹管文による平行施縫文を施す。内外面に赤系釉を施す。	にぶい黄褐色 10YR7/4	密	良	後期前集	
58	C3グリッド	縄文土器 土器片	胴部片	(3, 2)	無文、土器片縫に加工される。	にぶい黄褐色 10YR7/4	密	良	井草式	
59	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(3, 5)	口縁部は体部から外反気味に立ちあがり、口唇部は肥厚する。口縫直下は平底に作出され、外周には单脚縄文LIIを斜位回転で施す。体部には施縫文帯を模様化して施す。	明褐色 SYR5/6	密	良	井草式	
60	C3グリッド 表層	縄文土器 深鉢	口縁部片	(3, 6)	口縫部は体部から内傾して立ちあがる。口唇部は平底に作出される。無文で内外面とも横カゲが施される。	明黄褐色 10YR6/6	密	良	平板式	
61	C3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(5, 9)	口縫部は体部から内傾して立ちあがる。無文。内外面ともヨコカゲを施す。	褐色 7, SYR4/4	密	良	平板式	
62	C3グリッド	縄文土器 注口土器	口縁部片	(4, 1)	口縫部上面に1条の波縫をめぐらし、内面の上端に1条の波縫文を施す。外延の波縫に1～2条の波縫をめぐらす。体部に单脚縄文LIIを横位、斜位、縦位回転で施す。その上にU字型のモチーフを繰り、斜位のモチーフを織る。	褐色 7, SYR4/3	密	良	中津式	
63	C3グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	(4, 8)	粗い单脚縄文LIIを斜位回転で施す。	褐色 7, SYR6/6	密	良	夏島式	
66	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(2, 3)	口縫部に付帯施縫帶に下る渦巻文が施される。	にぶい黄褐色 SYR5/4	密	良	加EⅣ式 (古)	
67	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(3, 4)	波状口縫の突起部片。外縫に单脚縄文LIIを斜位回転で施す。	にぶい黄褐色 10YR4/3	密	良	加EIV式	
68	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(7, 2)	横走するU字縫に单脚縄文LIIを横位回転で施す。内面の上位に縫を有する。	にぶい黄褐色 10YR5/4	密	良	称名寺I式	
69	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(5, 1)	口縫部無文帯を残す。以下に粗糲の沈縫で施縫のモチーフを繰り、その上に单脚縄文LIIを斜位回転で施す。	暗褐色 10YR1/3	密	良	称名寺I式	
70	C4グリッド	縄文土器 深鉢	胴部 ～底部片	(5, 1) (3, 4)	体部は平底から外傾して立ちあがる。体部下位に粗糲の沈縫文を繰り、区内に单脚縄文LIIを継ぎ、斜位回転で施す。	赤褐色 SYR4/6	密	良	称名寺I式	
71	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部 ～胴部片	(20, 0) (8, 5)	口縫部は体部から内傾して立ちあがる。口縫部無文帯下に半岐竹管文による1条の波縫文をめぐらし、以下に粗糲の单脚縄文LIIを横位回転で施す。その上に斜位の波縫文を施す。	明赤褐色 SYR5/6	密	良	埴之内I式	

揭露番号	出土位置	種類 器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外側/内面	胎土	焼成	時期	備考
72	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (9.2)	口縁部は内側しつ立ちあがる。口縁部無文帯下に斜底竹管による1条の沈線をめぐらし、体部に単跡溝文Bを横位回転で施す。その上に斜位の沈線文を描く。	浅黄 2.5YR7/3	墨	良	縦之内I式	
73	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (10.2)	口縁部下に1条の沈線をめぐらし、以下に単跡溝文Bを横位回転で施す。その上に斜位の沈線文を描く。	明黄 10YR7/6	墨	良	縦之内I式 煤付着	
74	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (3.9)	渡状口縁部片。口唇部は平たんに突出せ渡頭部の上面は深く凹められている。把手部には円形を有し、横位の太い沈線文と円形削除文が施されている。	明褐 7.5YR5/6	墨	良	縦之内I式	
75	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (8.4)	口縁部無文帯下に1条の沈線をめぐらす。体部に単跡溝文Bを横位回転で施す。	にぶい黄褐 10YR5/4	墨	良	縦之内I式	
76	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (6.0)	口縁部無文帯下に1条の斜行隆帶をめぐらし、その上に斜みを有する。体部には単跡溝文を横位回転で施す。斜底竹管による斜行沈線文を描く。	にぶい赤褐 5YR5/3	墨	良	網取II式	
77	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (6.5)	渡状口縁部片。口縁部無文帯に渡頭部から1条の沈線がめぐ下り、渡頭部の上面に凹みは付され、そこから垂下する沈線の下端のは円形の凹みが付されている。口縁部無文帯下に單跡溝文Bを横位回転で施されている。調文の下位には乱文が付される。	黄褐 10YR5/6	墨	良	網取II式	
78	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	- (3.1)	口縁部は体部から直立して立ちあがり口唇部に肥厚する。口唇部外側から口縁部まで単跡溝文Bを斜位回転で施す。	にぶい褐 7.5YR5/4	墨	良	井草式	
82	B2グリッド	縄文土器 深鉢	胴部片	- (4.3)	全面に単跡溝文Bを斜位回転で施す。	褐 7.5YR6/6	墨	良	桶荷台式	
83	B3グリッド	縄文土器 土器片鍾	胴部片	5.9 4.0 1.4	全体に単跡溝文Bを斜位回転で施す。上下端に切り込みを有する。	にぶい褐 7.5YR5/4	墨	良	加III～IV式	
84	B3グリッド	縄文土器 深鉢	口縁部片	(5.8)	渡状口縁部片。口唇部は平坦に作出される。口縁部無文帯下に断面三角形の削落帯が弧状に施される。	赤褐 5YR4/6	墨	良	加IV式	
85	C4グリッド	縄文土器 深鉢	口縁 ～底部	(33.6)	口縁部は体部からやや内傾して立ちあがる。口縁部下に粗い単跡溝文Bを横位回転で施す。その上に斜位の沈線文を施す。	明赤色 5YR5/6	墨	良	縦之内I式	

## 土器器

揭露番号	出土位置	種類 器種	部位	口径 底径 器高	部位・残存率・製作技法・その他特徴	色調 外側/内面	胎土	焼成	時期	備考
79	C4グリッド	土器器 片	胴部片	- (3.2)	水滴き形態。墨書の一部が体部外側にみられる。	にぶい褐 7.5YR7/4	墨	良	古代 (9～10世紀)	
80	C4グリッド 複数	土器器 壺	胴部 ～底部	- (6.1) (2.6)	平底から体部は外傾して立ちあがる。	明褐 7.5YR5/6	墨	良	古墳時代 前～中期	

## 石製品

揭露番号	出土位置	種類 器種	計測値(cm)				Oは推定値	部位・残存率・製作技法・その他特徴	石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重さ(g)				
64	C3グリッド 表層	石器 打製石斧	(8.1)	(5.7)	(1.65)	97.5	小型打製石斧。下平の一部を欠く。分胴形打製石斧。表面は丁寧に調整されるが裏面は大きく自然面を残す。	粘板岩		
65	C3グリッド	石器 石磨	3.45	2.2	0.6	3.47	無茎石磨裏面とともに丁寧に削離されている。	黑曜石		
81	C4グリッド	石器 砾石	(7.2)	(5.6)	1.2	64.1	表面裏面とも丁寧に削離され平滑となっている。	砂岩		
86	35号遺構	石器 石片	-	-	-	181.3	表面は平滑に摩耗している。被熱痕あり。	安山岩	写真のみ	
87	C4グリッド	石製品 磨石	-	-	-	296.2	半欠品。上下面および側面とも平滑に磨離されている。	流紋岩	写真のみ	
88	C4グリッド	石製品 圓石	-	-	-	181.0	半欠品。表面裏面と側面に平滑な磨離面がみられる。表面に凹みが明瞭にみられる。橢円形を呈する。	安山岩	写真のみ	
89	C4グリッド	石器 磨製石斧	-	-	-	102.9	磨製石斧の基部片。表面裏面とも丁寧に磨かれている。	粘板岩	写真のみ	

### 第3章 うならすず遺跡出土貝の分析

28号遺構の覆土上部で小規模な貝層を検出した（第11図）。遺構形態は縄文時代後期の小堅穴に似るが、第2章第2節の記載のとおり古代以降時期不明と判断されたが、貝類の分析結果からの所見を述べる。

**分析対象・方法** 貝層は、調査区境界に若干掛かっていたが、径30cm、厚さ10cmの混貝土層全量、18.5リットルを採取した。目の開き5mm・2.5mm・1mmのフリイを使って水洗とフロテーションを行い、貝類は5mm、2.5mmメッシュに残ったものを抽出・集計した。巻貝は殻口下端を遺存するもの、二枚貝は蝶番の中央部分が遺存するものを1個とし、二枚貝は左右の多い方をもって最小個体数とした。計測は個体数の多い3種について行った。なお、フロテーションにより多数（204点）の微小貝を検出したが同定未了である。このほかC4区の縄文時代包含層でも約1リットルの保存の悪い貝類が取り上げられ、個体数はイボキサゴ72、シオフキ2であった。

**分析結果** 5科7種、同定個体数は356である（第3表）。貝種組成（第4表）は東京湾内湾干潟に多産したハマグリ・イボキサゴ・シオフキが大半を占め、その他も同一の海域で採取可能である。ハマグリが50.8%と過半を占め、イボキサゴの21.9%、シオフキの21.6%を加えた主要3種で94.4%となる。アサリ・アカニシ・オキシジミ・ツメタガイが混じるが數は少なく、構成種は少ない。ハマグリは平均53.8mm・最大71.4mm、シオフキは平均45.1mm・最大54.3mm、アサリは平均44.5mm・最大48.5mmといずれも大きく（第5表）、貝類採取活動が低調な時期に、大きな個体を選んで採取したものと推定される。既存の都川水系の分析例からみると、本調査区で遺物の主体を占める縄文時代中期後葉から後期前葉のデータには整合しない。二枚貝のサイズはこれほど大きい事例は知られておらず、また、イボキサゴが突出せず、かご等を用いたイボキサゴ漁によって必ず混じるウミニナ類・アラムシロもみられない。戦国時代の16世紀以降はハマグリが減少しシオフキやアサリが上回る傾向がみられる。データは古墳時代後期以降から平安時代のデータに調和する。奈良・平安時代にも縄文時代の小堅穴に類似する土坑が多数知られているので、この時期の蓋然性が高いと言える。

第3表 貝類種名

腹足綱	原始腹足目 中腹足目 新腹足目	ニシキウズガイ科 タマガイ科 アカガイ科	イボキサゴ ツメタガイ アカニシ	<i>Umbonium (Suchium) moniliferum</i> <i>Glassaulax didyma</i> <i>Rapana venosa</i>
二枚貝綱	マルスダレガイ目	バカガイ科 マルスダレガイ科	シオフキ ハマグリ アサリ オキシジミ	<i>Mactra quadrangularis</i> <i>Meretrix lusoria</i> <i>Ruditapes philippinarum</i> <i>Cyclina sinensis</i>
	計	5科	7種	

第4表 貝種組成

種名	個体数	%
ハマグリ	181	50.8%
イボキサゴ	78	21.9%
シオフキ	77	21.6%
アサリ	10	2.8%
アカニシ	7	2.0%
オキシジミ	2	0.6%
ツメタガイ	1	0.3%
合計	356	100%
水洗前体積(ℓ)	18.5	
微小貝	204	

第5表 計測値分布 二枚貝殻長

mm	ハマグリ	シオフキ	アサリ
-30.0			
-35.0	1		1
-40.0	5	2	
-45.0	6	22	
-50.0	15	23	4
-55.0	15	4	
-60.0	23		
-65.0	13		
-70.0	4		
-75.0			
-80.0			
試料数	83	51	5
平均	53.8	45.1	44.5
標準偏差	8.2	3.1	5.4

## 第4章 うならすず遺跡の調査成果 ーまとめに変えてー

### 1. 調査成果

うならすず遺跡では、平成2～7・12年度に発掘調査が行われ、縄文時代中期末の加曾利EIV式～後期前葉の堀之内I式と古墳時代・平安時代の集落の存在が明らかになっている。

本調査区は平成12年調査地点からは西側に位置しており、台地縁辺部に該当する。本調査で検出した遺構は、縄文時代中期～後期の竪穴建物跡1軒(内部ピット10)、屋外炉1基、土坑18基、ピット11基で計31基を確認した他、古代～中世と思われる遺構は溝跡1条、土坑3基の計4基である。出土遺物は縄文時代中期から後期を主体としており、古代から中世に属する遺物はごくわずかである。ここでは、過去の調査を踏まえて調査成果を概観・検討しまとめとする。

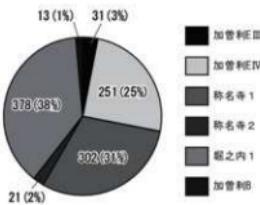
### 2. 遺構について

- ・1号竪穴建物跡の上面は大きく削平されており、ローム層直上での確認となっている。そのため、平成12年度調査と同様に柱穴と炉の配置から竪穴建物跡として判断している。
- ・包含層としたC3・C4グリッドからは大量の遺物が出土している。また、調査時に屋外炉と考えた33号遺構と内部に被熱範囲のある47号遺構が隣接していることから、本来は竪穴建物跡が存在していた可能性がある。
- ・30号遺構(溝跡)は詳細な時期は不明だが、概ね東西方向に走る溝である。平成12年調査で確認された溝跡は、北西～南東の直線的な1条と、北西～南東・北東～南西に屈曲した1条の計2条が確認されている。平面形が直線的であることや幅も類似していることから、接続はしていないが集落の区画や土地利用の境界などに関連する遺構の可能性がある。詳細については今後の周辺調査による事例の増加が待たれる。
- ・28号遺構上層、31号遺構下層に該当する層序の境目に貝がレンズ状に堆積している状況を確認した。28号遺構埋没時に窪みに廃棄されたものと考えられる。出土した貝については、調査区壁面際での出土であることから位置を記録し一括で取り上げている。詳細については第3章で報告しているので参照されたい。分析・同定結果によれば、これまでの縄文貝塚の組成とは異なっており、古代の組成に近似している。上面の削平が著しいために明らかではないが、周辺の古墳時代から古代の集落との関連が窺われる。

### 3. 遺物について

- ・本調査で主体を占める縄文土器は、中期～後期となっている。古代と思われる27号遺構から早期・稲荷台式、後期・加曾利B式が出土しているが、これは遺構の年代から流れ込みと考えられる。また、C3・C4グリッド包含層からは、C3で799点、C4で1188点とまとまった分布が見られ、草創期の平版式、早期の夏島式・井草式、D2グリッド包含層からは早期の稲荷台式が出土している。本調査での縄文土器の組成・比率は以下の通りとなっている。

時期・形式	点数	割合	時期・形式	点数	割合
縄文中～後期	2002	61.5%	加曾利EⅣ	251	7.7%
堀之内1	378	11.6%	加曾利EⅢ	31	1.0%
称名寺1	302	9.3%	称名寺2	21	0.6%
縄文後期	257	7.9%	加曾利B	13	0.4%



中～後期としたものを除けば、後期前葉の堀之内1式が38%、後期初頭の称名寺1式が31%、中期末の加曾利EⅣ式が25%を占める。仮に中～後期が形式分類できる破片だとしてもこの比率に大きな動きはないものと考えられる。

古墳時代から古代の遺物としては、土師器4点、須恵器1点が出土している。土師器のうち、C4グリッドから出土の第17図79は墨書きがみられるが判読は不明である。本調査地点の周辺には古墳時代から古代の集落が広がっており、そこからの流れ込みと推測される。

#### ・その他：石棒の流通拠点、石器の製作地点として

本調査での石器の出土総数は、35号遺構から石棒破片1点、C3グリッドから石鐵1点（第16図65）、打製石斧1点（第17図64）、C4グリッドから磨石1点、砥石1点、凹石1点の計6点である。過年度調査では石棒が一定量出土しており、石棒の流通拠点と推定されている。本調査地点では石棒は35号遺構から破片1点のみであり、流通拠点として扱うのは難しい。また、出土遺物のなかでも石器の比率は低い。過去の調査事例では石鐵製作に伴う剥片・碎片が出土していることから、チップなどの集中地点は土壤サンプルを採取も考えていたが、そのような地点も見られなかった。

#### 4. うならす遺跡と周辺遺跡

本調査の規模は斜面部ということもあり、集落の全容を述べられるものではないが周辺遺跡との関係について触れておきたい。

すでに述べてきたように今回のうならす遺跡は縄文時代中期末から後期初頭、加曾利EⅣ～堀之内式を主体とした遺構・遺物を確認している。周辺の調査成果に比してこれ以外の時期の遺物が少ないが、これは壇場造成の際に上面が削平された結果と考えられる。

うならす遺跡の過年度調査では、縄文時代の住居跡群は平成2年度調査区（中期加曾利E式期の住居跡が30軒検出）と平成3年度調査区（中期加曾利E式期～後期にかけての住居跡が20軒検出）に密集することがわかっている。平成6・7年度調査区は平成3年度調査区と隣接しており、時期的に後期が主体となるようである。これらの調査区は遺構の密度は極めて密であり、未調査区域である同一台地平坦部にも集落跡が広く展開すると予想されている。平成3・6・7年度調査の結果では、小谷の縁辺部、西向の緩斜面の北側から東側に沿って遺構の展開が見られており、平成12年度調査区は同一台地上の平坦部に位置している。平成12年度調査区と平成3年度調査区はいずれも壇場墓地を南北に挟んでおり、調査区が隣接しているわけではないが、検討の結果からは同一集落であることが推測されている。

これらの調査区で検出された住居跡は中期加曾利E式期の住居跡もあるが、中期末～後期初頭・後期

a 加曾利 E II



大型貝塚一大規模集落1つないし2つと複数の中・小規模集落が単位集落群をなし、それが集まって広域貝塚・集落群をつくる。

b 加曾利 E III



中期大型貝塚はすべてなくなる。加曾利 E II期の大規模集落のあった場所を避け、その周辺中心に中・小規模集落が点在する。中規模集落では貝採取が活発だが造構外の大きな貝層は形成されない。

c 加曾利 E IV・称名寺 I



集落分布は広域に分散。中期大型貝塚があった場所よりも集落の規模が大きくなる。貝塚の利用も活発だが造構外に大きな貝層は形成されない。後期大型貝塚の多くはこの時期から集落が形成されるが、称名寺2式期に連続しない。

d 堀之内 I



後期大型貝塚一大規模集落が広域貝塚・集落群をつくる。大半はbの中期大型貝塚とは別の場所が選ばれている。

「千葉市餅ヶ崎遺跡」より加筆・転載

第19図 集落分布の変化

前葉の住居跡の割合が高い。しかし本調査区南端に接する平成3年度調査区の屈曲部付近に展開する住居跡は、中期加曾利E式期が主体であることがわかつており、時期により居住域の移動が考えられるものの、集落自体は連続と統一していたものと考えられる。

うならずす遺跡周辺における加曾利E II式期～堀之内式期の集落分布の変遷をみると第19図(餅ヶ崎遺跡2019より転載)のようになる。県内で特に加曾利E IV式から称名寺式期の住居跡を多数検出した遺跡を挙げると、成田市長田雉子ヶ原遺跡(57軒)、千葉市餅ヶ崎遺跡(54軒)、千葉市うならずす遺跡(37軒)、市原市武士遺跡(27軒)、市川市権現原遺跡(23軒)、千葉市愛生遺跡(19軒)、香取市多田遺跡(12軒)などがある。このうち餅ヶ崎遺跡の54軒と長田雉子ヶ原遺跡の57軒は突出しており双壁といえる。今回調査のうならずす遺跡と愛生遺跡は同じ都川水系にあり、特に愛生遺跡は餅ヶ崎遺跡と同一台地上に隣接する関係の深い遺跡である。うならずす遺跡、餅ヶ崎遺跡、愛生遺跡の3遺跡は、①加曾利E IV式～称名寺式期以外の住居がない、②貝層の形成が活発、③石棒が多いという共通点がみられる。今回のうならずす遺跡調査では②の貝層の形成と③の石棒数の多さという点は確認できなかった。これは今回調査地点が集落域と台地の端部に位置していることに起因するものと考えられる。

最後に本遺跡の南側に存在する多部田貝塚についても触れておきたい。多部田貝塚は主に後期加曾利B式期に形成された貝塚であると考えられている。平成10・11年度調査では中期加曾利E IV式・後期堀之内式・加曾利B式・安行式の土器が出土している。特に大規模馬蹄形貝塚を形成した縄文人の居住域・生活域・環境復元など、広域での検証を行うことが可能な条件を有しており、その北端部を形成するうならずす遺跡との関係は緊密なものであろう。今後、多部田貝塚をはじめとする周辺遺跡の調査成果の増加により、中期から後期集落の検討が進むことが期待される。

## 参考文献

- 市立市川考古博物館1992『堀之内貝塚資料図譜』市川市立考古博物館研究調査報告第5冊  
大川清・鈴木公雄・工業善通1996『日本土器辞典』雄山閣  
株式会社アーネストワン・財團法人千葉市教育振興財团埋蔵文化財調査センター2009『大森第1遺跡－平成20年度－』  
株式会社地域文化財研究所2019『千葉市古山遺跡（第4次）－集合住宅建設に伴う埋蔵文化財調査報告書－』千葉市  
教育委員会  
加納実1994『加曾利E III・IV式土器の系統分析』貝塚博物館紀要21、千葉市立加曾利貝塚博物館  
加納実1995『下総台地における加曾利E III式期の諸問題－集落の成立に関する予察を中心に－』研究紀要16、千葉県  
文化財センター  
小林達雄2008『総覽 縄文土器』（株）アム・プロモーション  
宗教法人最福寺・財團法人千葉市文化財調査協会2001『千葉市うならずす遺跡』  
田中英世・栗瀬裕一他1988『千葉市餅ヶ崎遺跡 昭和60年度発掘調査報告書』千葉市文化財調査協会  
田中英世・中山貴正2003『千葉市平和公園遺跡群Ⅰ 多部田貝塚 貝塚跡 ムグリ遺跡』千葉市教育委員会  
田中英世・古谷涉2004『千葉市平和公園遺跡群Ⅱ うならずす遺跡』千葉市教育委員会  
谷藤保彦・閔根慎二1999『縄文土器論集』一縄セミナー10周年記念論文集一六一書房  
玉田芳英2007『日本の美術498（縄文土器 後期）』  
千葉市史編纂委員会1976『千葉市史・資料篇一原始・古代・中世一』  
西野雅人・尾崎沙羅2019『千葉市餅ヶ崎遺跡－千葉市動物公園第1期工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』千葉  
市教育委員会

# 写真図版





完掘全景（北東から）



完掘全景（北西から）

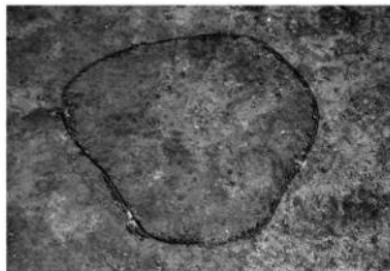
図版2



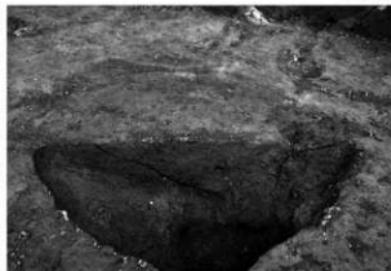
基本層序（南から）



1号竪穴建物跡完掘（西から）



17号遺構検出状況（西から）



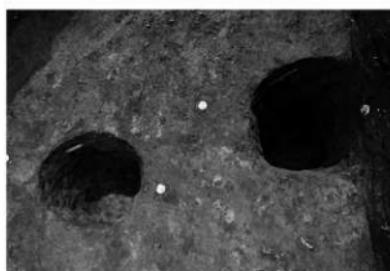
17号遺構断面（南西から）



17号遺構完掘（西から）



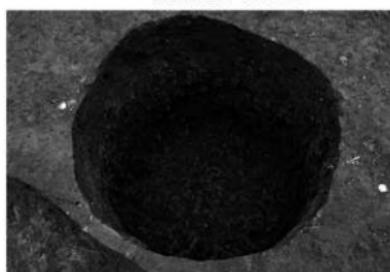
6号遺構完掘（東から）



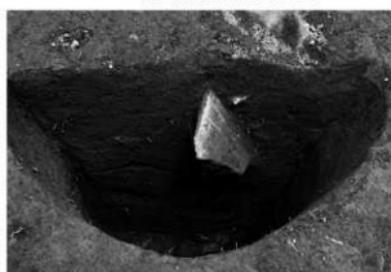
2・48号遺構完掘（北から）



7～11号遺構完掘（北西から）



37号遺構完掘（南から）



38号遺構土層断面（南西から）

図版4



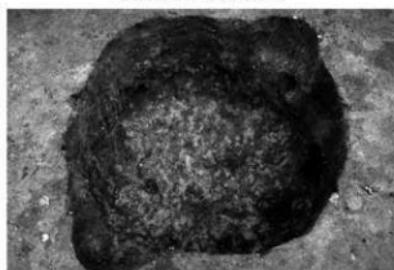
38号遺構遺物出土状況（南西から）



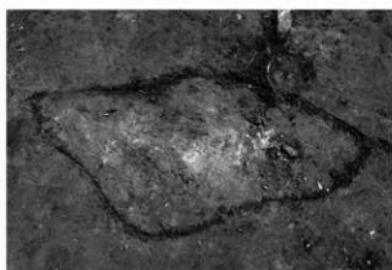
47号遺構断面(北から)



26号遺構断面（南西から）



26号遺構完掘（西から）



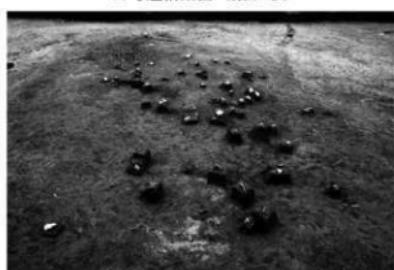
33号遺構検出状況（西から）



33号遺構断面（東から）



28号遺構遺物出土状況（東から）



包含層遺物出土状況（東から）



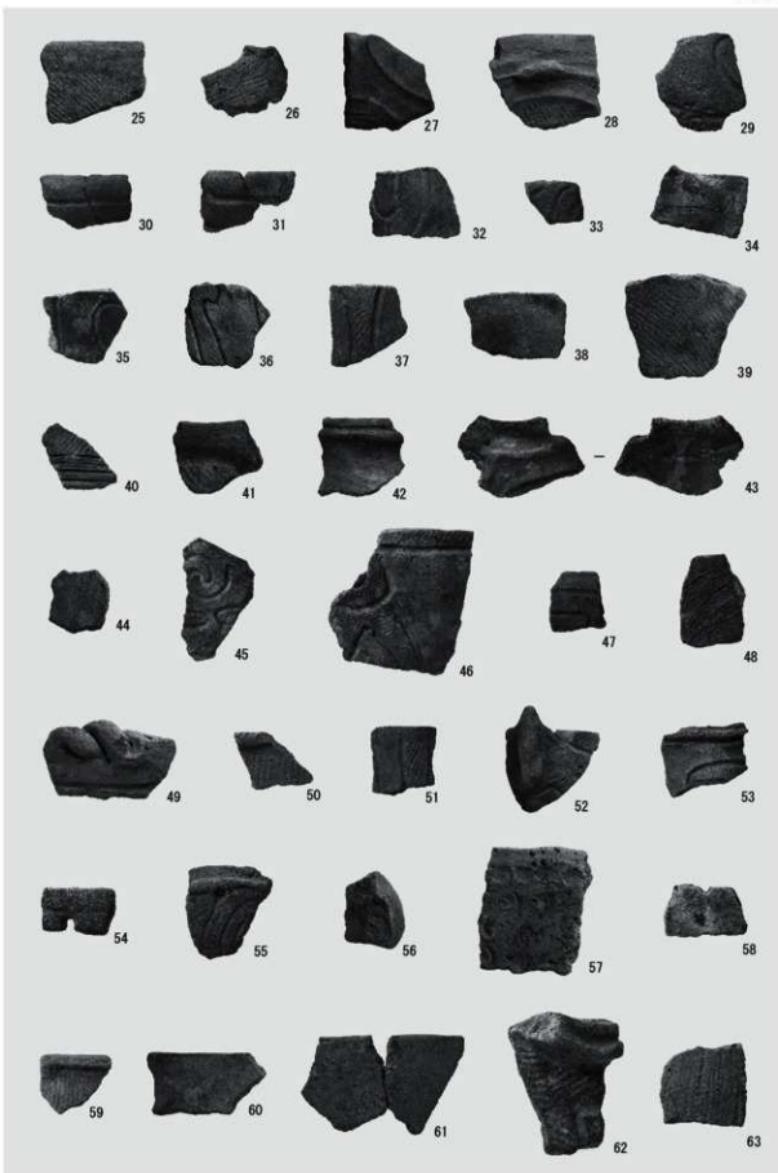
27・28・31号遺構完掘（東から）



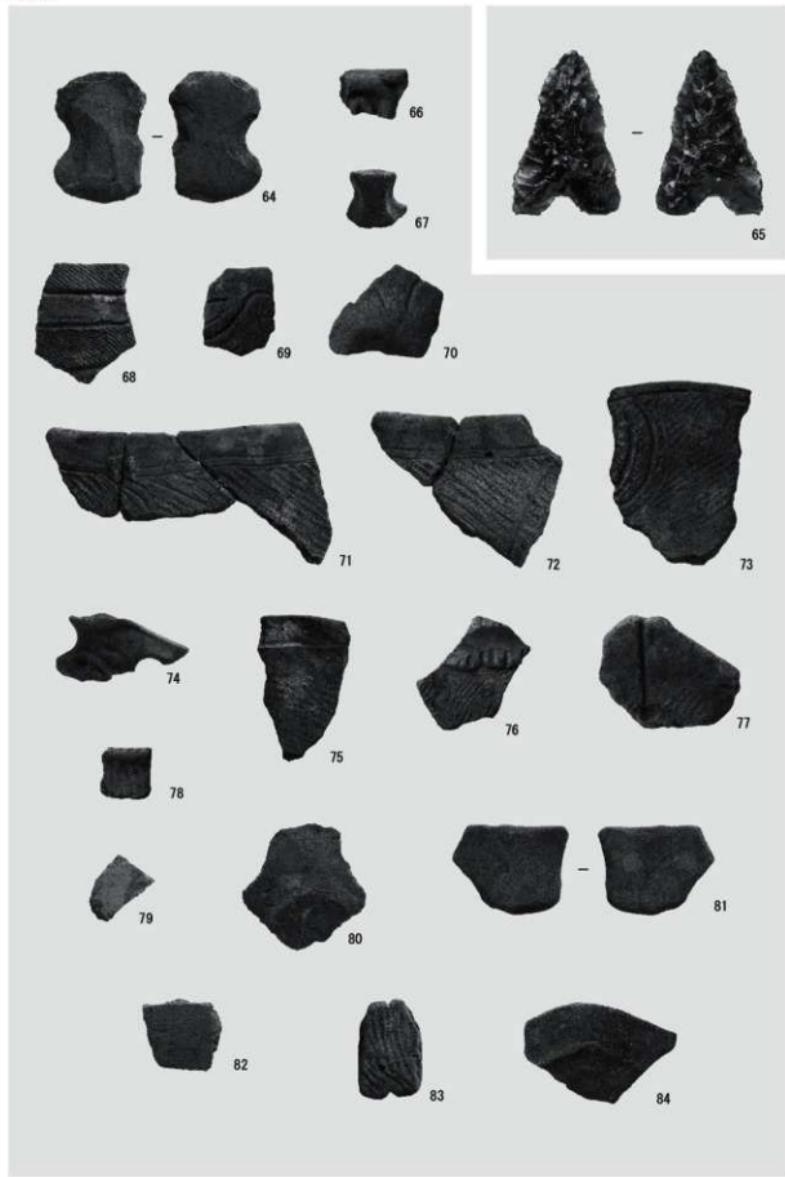
30号遺構完掘（西から）



出土遺物 1



出土遺物 2



出土遺物3



86



87



89



88



出土遺物 4



## 報告書抄録

ふりがな	ちばしうならすずいせき						
書名	千葉市うならすず遺跡						
副書名	—墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—						
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	西野雅人・井出洋子・小野麻人・青木 誠・濱村友美・堀江夏歩						
編集機関	株式会社イビソク 千葉営業所						
所在地	〒273-0033 千葉県船橋市本郷町405 203号 TEL:047-374-3287						
発行年月日	令和2年6月5日						
所収遺跡名	所在地	コード 市町村 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積	発掘原因
うならすず 遺跡	千葉県千葉市 若葉区多部田町 1175、1176-1 の各一部	12104	3206	35° 35' 51"	140° 11' 51"	20190415 ~ 20190511	200m <sup>2</sup> 墓地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項	
うならすず 遺跡	集落	縄文時代中期 ～後期	竪穴建物跡1軒 土坑18基、 ピット11基、	縄文土器 石器		縄文時代中期～ 後期	
		古代～中世	屋外炉1基、 溝跡1条、 土坑3基	土師器 貝		加曾利E III式～ 堀之内式期の集落	
要約	本遺跡は縄文時代中期～後期、加曾利E III式～堀之内式期を主とする集落であり、隣接する平成12年度調査の集落と一体をなすと考えられる。竪穴建物跡の床面などの残存状況は悪いが、炉や柱穴の残存が確認できた。また、古代から中世とみられる貝の堆積も出土している。周辺の過去の調査からも、本来は縄文時代中期～後期と古代～中世の2時期の集落が存在していたものと推定される。						

千葉市うならすず遺跡  
—墓地造成事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

令和2年6月5日

編集・発行 株式会社イビソク 千葉営業所

〒273-0033 千葉県船橋市本郷町405 203号

TEL:047-374-3287 FAX:047-374-3288

印 刷 富士出版印刷株式会社

